

LOVE & PEASE



神原 涼

この物語は1998年に書いたものだ。

まだワープロの時代だった。

当時高校生だったいちばん上が、文化祭に文芸部を手伝うことになり、

「今年は部員の作品だけじゃなくて、いろいろな人の本を売ろう」ということになったそうだ。

「で、書いてくれない？」

何を？

「小説」

ハ？ なんで私が？

「いろいろな人の本を・・・」

いやいやいや、私はキミの高校の生徒ではない・・・というか、むしろ親だし。

おそらく、書いてくれる人がなかなか見つからなかったのだろう。

「でも、小説なんて書いたことないからさあ」

「お願い！」

「どんなのを書けばいいの？」

「えっと・・・ 高校生向けの恋愛小説みたいなやつ」

当時私は40になったばかりではあるが・・・ 高校生向けの恋愛小説？

「で、締切は？」

「印刷所がギリギリで1週間後」

「いっしゅうか——んっ？」

ということで、7日で書き上げた。

特に設定は決まっていなかったが、主人公アカリ（なぜか気の強い女の子の名前は「あかり」になってしまう）の、

母親が離れから荷物を運び出している光景が浮かび、そこからは登場人物たちにまかせた。

会話がどんどん頭の中で進み、体力が追い付かなくて、「ちょ、ちょっと休憩！」と、

ベッドに倒れ込みながら、また続けるの繰り返しの7日間だった。

ワープロで書いたので、ファイルをPCに移すということはできず、

コピーに毛が生えたくらいの本にしたものを、読みながら、書き写している。

修正したり書き直したりしている部分もあるが、筋はひとつも変えてていない。

## 1. 離れの片づけ

---

そう、あいつが来るまでは、私の人生は平和だった。  
工務店を経営してるお父さんと専業主婦のお母さん、そして高校生の私。  
三人仲良く（まではいかないけどさ）暮らしてたよ。  
なのにさ・・・

ある日、学校から帰ってきたら、お母さんが裏の離れ（物置だけど）から荷物を出してた。

「なにやってんの？」

振り向いたお母さんの目は・・・ ツリ上がってるよおお。

わ、私、何かしたっけ？

「アカリ（私の名前ね）、あんたも手伝ってよ！」

なにを？なんて聞けなかったよ、だって金切声の音にしか聞こえなかったんだもん。  
キエーーーーッ！と同じってカンジ。

しかたなく一緒に荷物を運んでると、触ったらバチバチッて静電気起きそうなくらい  
神経ビリビリのお母さんが言ったんだよ。

「まったく、あんたのお父さんも勝手なんだから！」

お母さんて、お父さんにアタマにきてるときは、いつも“あんたの”ってつけるんだよね。

私のせいじゃないっての！

「どうしたの？」

私は、“お母さんの味方よ”ってな当たり障りのなさそうな声で聞いてみた。

「知り合いの子を引き取るんですって！」

吐き捨てるようにそう言って、プリプリしながら奥に入っていくお母さん、ちょっ、ま、待って  
！

「な、なにそれ？」

お母さんは荷物を床に置いて、仁王立ちになって私の方を向いた。

こ・・・ 怖い・・・

もうっ！ お父さん！ 何したのか知らないけどさ、お母さんをこんなにしちゃって、  
迷惑被るのは私なんだから――！

「ずっと前に勤めていた人が亡くなったのよ」

「だれ？」

「あんた知らないわ、おじいちゃんの代からの人よ」

「ふうん」

「その人のお孫さんがね、身寄りが誰もいないから・・・」

お母さんここでため息ひとつ。

「お父さんが引き取るんですって」

「な～んでよ？」

「おじいちゃんの代からいて、自分もその人に一から教えてもらったんですって。

今の自分があるのはその人のおかげだとか言ってたけどね」

「だからってさあ、孫まで引きとらなくてもよくない？」

「知らないわよ！ お父さんに言いなさいよ！」

お・・・っと・・・ わ、話題を変えよう。

「そ、その、孫って、何歳？ 幼稚園？ 小学生とか？」

「小学生？ フッフッフッ」

な、なにその笑い？ 目が全然笑ってないし、不気味だよおお。

「高校生」

「ン？」

コーコーセー？

「三年だから、あんたの一学年上」

「コ、コーコーセーって、高校生っ!？」

「そうよ、そう言ったでしょ」

「なにそれー！ 高校生なら一人で暮らせばいいじゃん！」

「あんたのお父さんがね」

出た！ また“あんたのお父さん”！

「あと一年で卒業だから、せめて高校くらいは卒業させてやりたいんですって」

「だからって引き取らなくてもいいじゃん！ 学費出してあげるとかさあ、それくらいで・・・」

「お父さんに言ってよ！」

あ、ヤバ、えっと・・・

あ・・・ でも、高校生だったらちょっと楽しいかも。

私一人っ子だからお姉さん欲しかったし、一緒に出かけたりとか、あ・・・

でも、ギャルギャルしてる子だったらイヤだなあ、苦手なんだよねえ、ああいうの。

でも、お父さんがギャルギャルしてる子引き取るわけないよね。

お父さんはもっとああいうの嫌いだし、卒業させたいっていうくらいだから優秀なのかな？

「ポーッとしてないで荷物運んでちょうだい！」

「あ？ う、うん」

よいしょっと。

私の頭の中では、ひとつ年上の優しくて頭のいいお姉さんとおしゃべりしてる光景が見える～♪

「ねえねえ、その子、名前はなんていうの？」

「カズオ」

やだ、お母さん、ピリピリ過ぎて頭混乱してるよ。

「ヨでしょ？ カズヨさん？」

「カ・ズ・オ・くん！」

「え？」

「男の子よ！」

「え・・・ エ————ッ!? オトコ————っ!？」

ウソでしょウソでしょウソでしょ————！

「まったくお父さんも男の子を引き取るなんて。

うちは年頃のアンタもいるんだし、私だって男の子なんて育てたことないって言ったのに。

何考えてるのかしら、もうっ」

なに考えてんのよ————！ ジョ————ダンじゃないよ————！

イヤだよ！ 赤の他人の知らない男がうちにいるなんて、一緒に暮らすなんて！

「私はイヤ！ 絶対イヤ！」

「しょうがないでしょ、お父さんが決めちゃったんだから。

それに明日にはもう来るっていうんだから」

「あした————？」

め・・・めまいがする・・・

心の準備もできないじゃん！ てか、永遠にできないよ！

こんな重要なこと、なんで勝手に決めちゃうのよ！

クソ親父————！ 一生恨んでやる————！

え？ ちょ、ちょっと待って。

高校生ってことは・・・ ま・・・ まさか・・・

「まさか、そいつ、私と同じ高校に通うの？」

「まさか！ そんなに頭よくないでしょ」

お母さんは私が進学校に通ってるのが自慢。

家では怒ってばかりなのに、外ではさりげなく（ミエミエだと思うけど）自慢してるっぽい

。

まあでも、ちょっとホッとしたけど。

「お父さんは全日制の高校に編入させてあげるつもりだったらしいんだけど、

本人が、お父さんの工務店で働きながら定時制に通いたいって言ったんですって」

へえ、殊勝なこと言うじゃん。

でも、引き取ってもらってんで、いい子ぶってるだけかもね。

その手には乗らないんだから！

お母さんと二人で離れを片づけてたら、もう晩御飯の時間。  
自分で勝手に決めたくせに、私たちに片づけさせておいて、  
な——んにもないみたいな顔してご飯食べてるクソ親父！  
いっつもそうなんだから！ 親が決めたことは子どもが口出しするもんじゃないみたいにさ！  
ノンキな顔してビール飲んでるのが憎いっ。

「ン？ アカリ、どうした？」

どうしたじゃないよ！ 言いたいことい——っぱいあるよ！

「べつに」

言ってもしかたないのわかってるから言わないけどねっ。

## 2. 来たよ・・・

---

次の日は憂鬱な気分で行った。

あ〜あ・・・ 帰ったらいるんだよなあ・・・

頬杖ついてボーッと窓の外を見ていた昼休み。

「山岸、あのさ」

ドキッ

ユウジくんが話しかけてきた・・・！

私はユウジくんが好き。

頭のいいヤツが集まるこの進学校の中でもトップクラス。

お父さんが大学教授だって聞いたけど、たしかに学者一家の中で育ったってカンジの品のよさ。

ウツトリ〜♪

ユウジくんには好きだって言ってない。

「どうしたの？」

仲のいいクラスメイトってカンジで接してる。

だって、物欲しそうな女に見られるのイヤだし、そういうの嫌いそうだし。

「昨日山岸が読んでた本、読み終わったら貸してくれる？ おもしろそうだからさ」

「もう読み終わったらから（ウソだけど）いいよ」

カバンの中から本を出してユウジくんに渡す。

なんともない顔して渡してるけど、心臓はドーンツキドキしてる。

「Thank you!」

さっきの英読の授業で、先生がやたら強調して発音するから皆で笑いこらえてたTHの発音。

ユウジくんはわざとTH強調してニコツとした、はあああ〜 とろけちゃう。

けど、私は、「バカ」と言って笑ってみせた、必死にね————っ。

あれ？ えっ？ ちょっと待って。

あの、なんだっけ、孫、そいつが私の家に住むってユウジくんが知ったら・・・

ヘンな誤解されたらどうしよう？ やだやだやだ！

も————っ、本当にイヤ！

はあ・・・

胃袋出そうなくらい深いため息ついて・・・

「ただいま・・・」

「アカリ？ こっちにいらっしゃい」

お母さんのよそいきの声居間から聞こえた。

居間に入ったら・・・ いた！

第一印象？ 「サエないヤツ」。

薄汚れたジーパンにヨレツとしたTシャツ。

胸のところの印刷された文字が薄くなっちゃってるくらいヨレツ。

しかも、“LOVE & PEASE”ってなに？

PEACEでしょ、CがSだよ、どこでそんなもの売ってるの？ どうでもいいけど。

「アカリ、カズオくんよ、ご挨拶なさい」

昨日はさんざん文句言ってたくせに、優しい人ぶった声でお母さんよく言うよ。

「はじめまして」

私はヤツの顔も見ないで無表情な声で言ってやった。

あんたなんか絶対受け入れない。

エッ、な、なに？ ガバッと立ち上がって、やだ、傍に来ないでよ！

身長高かった！ どーでもいいけどね、マジでね。

「コンチハ！ カズオっす！」

アッタマ悪そうなしゃべり方！ 二言でわかるよ。

「ほら、アカリ、あんたもここに座ったら？」

ハ？ なに言ってんの、お母さん？

「宿題があるから」

冷たーく言い放って居間を出た。

後ろでお母さんの取り繕った声がする。

「もう、あの子ったら・・・ ごめんなさいね」

なんでそんなヤツに気使ってるの？ いい気になってつけ上がったらどうするのよ？

私は知ーーーらない！

部屋に入って、制服のままベッドに大の字。

あーー、イヤだ。

案の定口クでもないヤツだよ。

あの服！ 信じらんない！ サイトー。

にしても、本当に来るって図々しいよ。

親戚でもなんでもないんだから、ふつう誘われても遠慮するよ、来ないよ。

ああもうっ、あんなヤツと一年も一緒に暮らすなんてサイトー！

晩御飯。

私の人生の中で、最悪の晩御飯。

まだね、まだこれが今晚一回だけなら我慢するよ。

あと一年も、コイツと一緒にご飯食べるなんてムリ！

だって、コイツ、食べ方すっごい汚いんだもん。

口の中からはみ出すくらい突っ込んでやってさ。

「ガツガツ食べる」って言葉はこういうことを指すのかっていうくらい。

見ないようにしよう、視界に入れないようにしないと吐いちゃうかも。

ビールで赤い顔のお父さんは上機嫌。

「カズオくん、疲れただろ、長旅だったもんなあ」

疲れる長旅させなきゃよかったでしょ！

「いやあ、俺、あんなに電車に乗ってんの初めてで楽しかったっすよ」

ああもうっバカっぽいしゃべり方！

しかも、口の中に入れたまましゃべるなよ！ 汚ったないなあもうっ。

「ごちそうさま」

「あら、アカリ、もう食べないの？」

「食欲ない（なくなったよ）」

この空間から早く出たい！

急いで食器を流しのところに置いて、ダイニングのドアを開けた・・・らっ

「カズオくん、食事が済んだら風呂に入れよ」

「ウソッ！」

思わず叫んじゃった。

お父さんもお母さんもアイツもビックリした顔で私を見てるけど、いちばんビックリは私だよ！

「な、な、な、なんで？」

なんでソイツが私の家のお風呂に入るの？

私はソイツが入ったお風呂に入るってこと？

「疲れてるだろうから、風呂に入って早めに休んだ方がいいだろ」

この・・・ 鈍感オヤジーーーー！

年頃の娘に、得体の知れないこーんな男と同じお風呂に入れっていの!?

お父さんの後だってイヤなのに！

あーーーーっもうもうもうっ、サイテー！

バンッてダイニングのドア閉めて、自分の部屋に走って入った。

宿題しようと思っても、問題の文字が頭に入ってこない。

イライラしてカッカしちゃって、するよ、するでしょ！

これから毎日アイツのあんな汚い食べ方見ながらご飯食べて、

しかも、同じお風呂使うって・・・ え？ ちょっと待って。

お風呂も同じってことは・・・ トイレも？

ギャーーーーー！ イヤーーーーー！ 絶対イヤーーーー！

お父さんの後だって絶対イヤなのに、なんでなんでアイツが・・・した後に、ギャーーーーー！

しかも、アイツが座った便座に・・・ イヤーーーーー！

吐く！ 考えただけで吐きそうだもん。

工務店なんだからさ、簡易トイレ持ってきてよ！

なんて言ったって、あの鈍感オヤジに私の気持ちなんかわかるわけないよね。

もう・・・ああ・・・もう・・・

涙出てきちゃったよ・・・。

サイテーサイテーサイテーーーーーー！

### 3.忘れ物と家庭科

---

まいったなあ、二時間目が終わって気がついた。

家庭科の裁縫道具と課題の縫いかけブラウス忘れてきちゃったよお。

あのおばあさん先生、うるさいんだよね。

お母さんに頼むしかない！

「なにやってるのよ」

はいはい、ごめんごめん、持ってきて。

「だから朝聞いたでしょ？ 忘れ物ないのって」

いいから、持ってきて。

「あんたはいつもそうなんだから！ お母さんだって忙しいんだからね！」

わかりましたわかりましたから、持ってきて！

「お母さん、お願い！ あの先生厳しいから、忘れ物したら成績に響いちゃうの」

「まったくもう、しかたないわねえ」

成績に響くって言葉に弱いんだよね、お母さん。

「お昼休みに校門のところで待ってるから！ お願いね！」

「これで最後だからね！ 次に忘れ物しても届けないわよ」

「うん、うん、わかった、お願いね」

あー、よかったあ。

早めにお弁当食べて校門の近くで待ってるけど、そろそろ来てもいいよね、まだかな？

やだ、お母さん忘れた？ 電話かけてみる？ でも、その間に来ちゃったら・・・ あれ？

誰か走ってくる・・・ お母さん？ 違うな、男の・・・ え？ エッ？ エーーーーッ？

な、なんで？ なんであいつが走ってきてるの？ なんでーーーー？

「アカリちゃーん！」

や、やだ、大きな声で、あ、ちょ、手なんか振らないでよ！ 来るな！ こっち来るなーー！

シッシッて手で追いやったら、バカ！ 嬉しそうな顔で余計に大きく手振ってんじゃないわよ！

「アカリちゃん！ 間に合った！」

ニコニコしてそう言うヤツのTシャツの胸元つかんで校門の陰まで引っ張っていった。

誰にも見られたくないもん、こいつと、こいつなんかと・・・

「何しに来たのよっ!？」

「アカリちゃんに忘れ物届けてくれって、お母さんに頼まれてさ」

お母さん？ なんであんたが私のお母さんをお母さんて、まあ、今はそれは、とにかく・・・

「社長と現場から昼メシ食いに家に戻ったら、お母さんに頼まれて、すっ飛んできた」

笑ってないで、とにかく・・・

「は、早く！ 渡して！」

「何を？」

「何をじゃないわよ！ 私の！ お母さんに頼まれた物！」

「あ、そっか」

あいつはニッコニコしながら紙袋を・・・

ていうか、なんでそんな恰好で来るかなあっ!?

汚ったないTシャツに泥だらけの作業ズボンに、汚ったな～いゴム長ってカンベンしてよお。

その首に巻いた薄汚れたタオルくらい取ってから来いっての！ てか、なんで来たかなあっ!?

あああああっ、気が狂いそうだあああっ。

「ここがアカリちゃんの学校かあ、スゲーなあ」

ノンキな声出してアホづらして校舎見上げて・・・ないで

「さっさと帰って！」

「あ、そっか、授業始まっちゃうのか」

あんたに早く消えてほしいだけ！

「そんじゃ、勉強がんばってな」

ニッコニコして手なんか振って帰っていった・・・ ホッ

ああああ、もう・・・ 寿命10年は確実に縮まったよ。

まあいい、家庭科室に・・・

「ヤマギシさん、さっきの人、誰？」

「え？ さっきのって？」

「門のところで話してた・・・」

ゲッ 見てたんだ・・・

「あ、あれは、お父さんの会社の従業員」

ン？

「へえ、なんで学校に来たの？」

っさいなあっ、関係ないでしょ！

「お母さんに言われて忘れ物届けに来ただけ」

「なんだ、そうなんだ」

そう・・・だ、そうだよ！

本当だもん、お父さんの工務店で働いてるんだから従業員だよ！

住み込みの従業員！

それだそれ！ それなら家にいてもおかしくないもんね。

なんだか少し目の前が明るくなったかもお。

晩御飯のとき、アイツはいなかった。

定時制の高校は夜の授業。

これで夕食はあのおぞましいの見なくて済むし、朝は向こうの方が早いから、顔合わせなくていいんだよ、はあああ、よかったあ。

あ、でもまだお風呂とトイレの問題があった。

お風呂は・・・ あいつは学校で夜遅いから、私が先に入れるよね、うん。

万が一あいつが先に入ることがあつたら・・・ シャワーだけにしよう。

トイレは・・・ 除菌クリーナーと消臭スプレーで乗り切るしかないよねえ。

工務店なんだからさあ、離れにトイレ作ればいいのに。

なんのための工務店だったの！ まあ・・・ トイレのためじゃないけどさあ。

好きな曲をかけながら、明日の予習してま～す。

お母さんは、「ながら勉強は身につかないんだから」って言うけど、時代が違うよ。

それに、私、英語は得意だしね。

大学は英文科に入って、将来は通訳か翻訳やりたいな。

だけど、せいぜい外資系の会社に入れればいいってカンジかな。

夢持てないよねえ、今の世の中。

ちょっと休憩しよっかな、紅茶入れてこよう。

ダイニングのドアを開けたら、ゲッ！ あいつがいた！ そうか・・・ 晩御飯か・・・

「おっ、アカリちゃん」

だからっ、口に入れたままニタ～ツとするなっていうの！ 無視無視！

背中向けて紅茶入れてさっさと部屋に戻ろう。

「家庭科だっけか？ うまくできたか？」

なにそのえらそうな言い方！ あんたに関係ないし。

「俺さ、けっこう得意なんだ」

なに一人で話続けてんたの？ いいけど。 無視無視。

「料理とかさ、裁縫、けっこううまいんだぜ」

ああそうですか、どーでもいい。

「俺さ、ちっちゃい頃からかあちゃんいなかったからさ。

じっちゃんのメシも、靴下とか、穴かがんのとか、俺がやってんだ」

苦労話聞かされても同情できないし。

かあちゃんとかじっちゃんとか、なんか育ちがわかるっていうか、

だから食べ方もあんななんだよ、ちゃんとしつけされてなかったんじゃない？ いいけど。

「アカリちゃんは、あれだろ、自分で料理とか裁縫なんてしねえだろ？」

なっ なにそれ？ バカにしてんの？ 料理や裁縫ができればえらいわけ？

そ、そりゃ、たしかに家庭科以外でしたことないけど、それは、そんな必要性ないんだもん！

うちはあんたの育った環境とは違うの！ もっと、えっと、アカデミックなの！

・・・って言ってやりたいけど、無視無視。

「ねえだろうなあ。お母さんこんなに料理うまいしさ。なんでもやつてくれんだろうなあ」

お母さんの料理がうまい？

そんなふうには思ったことはないけど、だって小さいときからお母さんの料理食べてたから。

まあね、こいつが作るものよりは美味しいんだろうね、知らないけど？ 知りたくもないし。

「今日もさ、俺、帰り遅いからさ、晩メシはコンビニで買って食うからいいって言ったんだけどさ。

お母さん、ちゃんと俺の分支度してくれててさ、嬉しかったなあ」

あたりまえじゃない。

お母さんは主婦なんだから、それがお母さんの仕事だもん。

なんかいい子ぶってんじゃない？ ちょっとムカつく。

かまわないかまわない、無視。

紅茶の入ったマグカップ持って、あいつの方なんか全然見ないでキッチンのドア開けて・・・

「アカリちゃん、もう寝んの？」

ハ？ あんたに関係ないでしょ！ 私はね、あんたと違って進学校で必死に・・・

「予習ですっ」

勉強してるのよっ！

あっ・・・ 口きいちゃった・・・ ま、まあいい、一言だし記憶から消す！

「そうかあ、すげえなあ、俺もやらなきゃなあ」

やってもやらなくてもどうでもいいと思いますけど、どうぞ勝手に。

バタンッ

「アカリちゃーん！ おやすみーん！」

ヒーッ！ 大きな声で、なんかもう、もう、もうっ

「あのねっ」

バツとドア開けた私をビックリした顔で見てるけど、どうでもいい！

「アカリちゃん、どうした？」

「そ、その、アカリちゃんて」

「うん、アカリちゃんだろ？」って私のこと指さすけどっ

「やめてくれない？」

「なにを？」

「アカリちゃんて呼ばないでくださいっ」

「でも、アカリって名前だよな？」

「そうだけど、そんな、なんか、親しげに呼ばないでくださいっ」

「なんで？」

「な、なんでって・・・ まだ会ってから一日しか経ってないし、それに、友だちでもなんでもなし」

「じゃ、なろうよ！」

「ハ？」

「友だちになっちまえばいいんだろ？ そしたらアカリちゃんとカズオでいいじゃん」  
ニコニコしてとんでもないこと言っている自覚がないのが怖いよっ。

だいたい・・・

「友だちだって、アカリちゃんなんて呼ばないんですっ」

「じゃ、なんて呼ぶんだよ？」

「ヤマギシさん」

ブハッと、なんで吹き出すわけ？

「それはおかしいだろ？ ヤマギシさん家に住んでてさ、ヤマギシさーんて呼んだら、  
社長もお母さんも振り向いちゃうよ、みんなヤマギシさんだもんよ」

こいつの言うことが、悔しいけど、もっともなのが腹がたつっ。

「な？」

な？だとおおお？ アッタマきた！

「だったら言うけど、あんた、私のお父さんのこと社長って呼んでるでしょ？」

「うん、俺は従業員だから、社長は社長だろ？」

そうよ！ あんたは従業員なのよ、住み込みの！

「そういう関係性からいくと、私のお母さんは『社長の奥さん』てことよね？」

「ああ！ そうだ！ そうだな」

「奥さんて呼ぶべきじゃないの？ お母さんじゃなくて！」

「そっか、うん、そういうことになるよなあ」

「だとしたら、私は、お、お嬢さんってことでしょ？」

「オジヨーサン？」

ポカンとしたその顔はなにっ!? わかってるわよ、私はお嬢さんてガラじゃないわよ！

「でも、そういうことでしょ？ あんた、家族でもなんでもない赤の他人なんだから。

お母さんとか、アカリちゃんとか、気安く呼ばないでよ！」

あれ？

一瞬・・・ ヤツの顔が暗くなった・・・ ように見えたのは・・・ 気のせい？

「そうだよなあ、そっかあ、うん、そうだよな」

ニコニコしてる・・・ ってことは、やっぱり気のせいだった。

「よし！ お嬢さんだ！ うん、お嬢さん」

そんなに連呼されるとバカにされてるみたいに聞こえるんですけど。

「あ、俺のことはカズオでいいからな」

あんたの名前なんて永遠に呼ぶことないと思う。

「それじゃ」

「あ、ちょ、アカ、じゃなくて、お嬢さん」

自分で言うておいてナンだけど・・・ お嬢さんて言われるとこっぴどかしい・・・

「風呂のことなんだけどさ」

え？

「最初の日、社長が俺に風呂に入れって言ったとき、アカ、じゃねえ、お嬢さんイヤそうだったろ」

わ、わかっちゃった？

「今日も俺が帰ってくる前に急いで入ったんだろ？」

そうだけど・・・ 傷ついたのかな・・・ いくらなんでも、ちょっとひどかったかな・・・

「あ、あの・・・ それは・・・」

「大丈夫だって！ 俺、絶対覗いたりしねえって！ 安心しなよ」

こいつ・・・ ホントきらい！

バタンと閉めたドアの向こうから、アイツが大声で言った。

「お嬢さ——ん！ おやすみ——！」

大嫌いっ！

## 4.日曜日

---

あの夜から、できるだけアイツと顔を合わせないように、  
アイツがキッチンや廊下にいそうな時間は部屋から出ないようにした。  
なんで私が私の家の中でコソコソしなきゃいけないわけ？  
私がこんなに苦労してるのに、お母さんはなんだかだんだんアイツと仲良くなってるみたい。  
大きい荷物の片づけやゴミ出しなんか調子にのってやらせてるよ。

「なんだか息子ができたみたいだわ」

なんて、やめてよお母さん！

「だって、あんたなんか何もしてくれないじゃない。

カズオくんはなんでも嫌な顔しないでやってくれるんだもの」  
そりゃそうだよ、世話になってるんだからさ。  
ここに来る前は苦労なさってたみたいだから、こんな生活できるなら、  
ご機嫌とるにきまつてるじゃん。

アイツが来てから最初の日曜日の朝。

平日はすれ違いだからいいけど、休みの日は一緒にごはん食べるんだよおお。  
アイツを視界に入れないようにして朝食食べて、さっさと部屋に入っちゃおう。

「なあ、お嬢さん」

ギクッ な、なんで話しかけるのよ、しかも、お父さんとお母さんの前でお嬢さんて・・・

「お嬢さん？」

ほらあああ、お父さんとお母さんがポカンとした顔で聞き返したじゃ～ん。

「お嬢さんて、アカリのことか？」

「はい」

ヤ・メ・テッ

「カズオくん、アカリでいいのよ」

お母さん笑ってるし。

「そうだよ、アカリがお嬢さんなんて、ワーワーッハハハハ」

そこまで笑わなくてもいいでしょ！

てか、アイツーッ、わざと二人の前でお嬢さんって言って私のこと笑いものにしようと

「オトナのけじめっスよ」

なによ、私にそう言われたって告げ口するの？

「けじめ？ 何のけじめだ？」

お父さん！ 深く突っ込まないでよ！

「俺、社長ん家にお世話になって、働かせてもらって、つっても、まだまだ足手まといっスけど」

「いやいや、カズオくんは一生懸命でいって現場の棟梁も言ってるぞ」

あれ？ 話がちがう方にいってる？

「まだまだッス」

ヤツが頭かいてる、そんなことどうでもいいけど、よかった話題変わって。

「だから、もっとちゃんとけじめつけて、ちょっとイッチョマエの気分になりたいっつうか」  
えっ、戻る？

「社長とか奥さんとかお嬢さんて、そういうけじめみたいなの、しっかりつけたいっつうか」

「お父さんのことはあれだけど、私やアカリのことは今までどおりでいいのよ」

お母さん！ 余計なこと言わないでよ！

「なんか、ちゃんとけじめつけるってカッコイイなって、ちょっとおとなになった気分っうか」  
なんで・・・ こいつ・・・ こんなこと・・・ まじめに言ってるの・・・

言えばいいじゃん、私に言われただけだって、私がただアタマにきて言っただけだって・・・

「えらい！ よく言った！」

お父さん、バカじゃない？ そんなの真に受けてさ、ちがうんだよ、本当は・・・

「でもな、カズオくん、俺やお母さんは親代わりだと思って引き取ってるんだからな。

何かあったときは、親だと思って遠慮なく言うんだぞ」

「社長・・・ ありがとうございます」

あ～あ、もう勝手にやってればいいよ、仁義？ 義理人情？ どうでもいい。

やってらんない！

「ごちそうさま！」

「あ、お嬢さん、ちょっ、ちょっとまってよ」

一瞬固まったよ、なによ？ 私を巻き込まないでよ。

無視・・・しようと思ったけど、お父さんとお母さんがいるからできないじゃん。

「な、なに？」

「今日さ、なんか予定ある？」

「べつに」

あんたに関係ないでしょ。

「ほんじゃ、一緒にどっか行こうよ」

ハァァァァ？

「俺、こっち来たばっかできさ、どっこもわかんねえから、お嬢さん案内してよ」

「なっ・・・」

なんで私がっ？

なんで日曜日にあんたなんかと？

「それはいい！ アカリ、案内してあげなさい」

オヤジは黙ってて！

冗談じゃないよ、こいつと一緒に出かけるなんて、もし同級生に見られたりしたら・・・ 絶対イヤ！

「そうね！ アカリ、ほら、あんたの好きなケーキ屋とか、連れて行ってあげなさいよ」  
ジョー——ダンじゃないよ！ それってまるで、知らない人が見たらデートじゃん！

「わ、私、勉強があるから」

「な～に言ってんだ、休みの日に勉強してるなんて見たことないぞ、ハハハハ」  
してるよ！ 夜だけど・・・

「そうよ、いつもゴロゴロしてるだけなんだから」  
なにこれ？ なんで私、こんなによってたかって追い詰められてるの？  
私はイヤなの！ こいつと、日曜日に、ケーキ屋とか、イヤなの！  
て、言っても、私の言うことなんか聞いてくれないんだよ、いつも。  
わかった。

だったら何も言えないようにしてやる。

「私、今、生理だから具合悪いの」

「ア、アカリ！」

お母さんはあわてて、お父さんは気まずそうに咳払いしてる。  
ザマーミロ！ いつもいつもお父さんたちの言いなりになんかならないんだからね！  
あいつもこれで・・・ え？ なに？ なにニコニコしてるの？ ニコニコ？ ニタニタ？  
なんで気まずそうにしてないのよ？ 生理だよ？ そんなの聞いて平気？ 男子が？

「そっかあ、それならしょうがねえよなあ」

そ、そうよ、“生理”なんだから。

「そんじゃ、また今度一緒に行こうな」  
また今度なんて永遠にないっ！

生理なんて言っちゃったから部屋から出られないじゃん。

でも他に思いつかなかったんだもん。

あ～あ、これから毎週こんなことになるの？ もう誰か助けてよお。

閉じ込められた気分でイライラするよお・・・って、閉じ込められてるわけじゃないけどさあ。

あ、そうか！ 閉じ込められてはいないんだよ、見つからなければいいんだよ。

こ～っそり 裏口から 出た————！

あ——、解放感！

でもなあ・・・ 日曜日に一人で出かけてもねえ。

友だち誘えばよかったかなあ？ 誰を？ 日曜日まで会いたい友だちなんていない。

話すことなんて学校のことしかないし、そんなの明日学校でできるし。

本当は、ユウジくんと一緒にいたい。

ユウジくんとなら楽しいだろうなあ、このケーキ屋で一緒にお茶して・・・

想像しただけでドキドキしちゃった。

でもねえ、誘う勇気ないよ。

仲のいいクラスメイトってカンジにしてるから、それを突然「一緒に出かけない？」なんて、言えないよねえ、言えない、ミエミエだし。

ユウジくん、女の子っぽいカンジでこられるの嫌いそうだしねえ。

女の子なんだけどなあ、私もいちおう。

店の大きなウィンドウから見える外の景色は・・・ みんな誰かと一緒に歩いてる。

なんだか・・・ この世で私だけひとりぼっちのような気分になっちゃうよ。

だからって誰でもいいから一緒にいたいわけじゃない、ただホッとする場所が欲しいっていうか。

今や家はそんな場所じゃなくなっちゃったよ。

てか、今までだって、自分の部屋にいても、お父さんとお母さんにや〜んわり監視されてる、なんかそんなカンジなんだよね。

学校だって、みんなとワイワイやってたってホッとしたことなんてないよ。

どこにいてもそうだよなあ。

まわりに人がいても淋しくて・・・ 一人じゃないのにひとりって感じ。

帰ろっかなあ、ここにいても、なんかねえ。

まっすぐ帰るのはイヤだから、遠回りして駅のそばの公園抜けて行こう。

ポッカポカの日差しの中で、親子連れやカップルばっか。

あ〜あ、ここでもひとりだよ、いいけど。

ン？ あれ？ 向こうの端っこのベンチに座ってる・・・ どこかで・・・って、アイツだ！

アイツは私がここにいないことに気づいてないみたいだけど。

そりゃそうだよ、私は“生理”なんだから、ここにいるはずなくて。

なんかノンキにボーッと空を見上げてるけど、なんでここにいるんだろう？ どうでもいいけど。

まあそうだよ、まだこの辺りのこと知らないって言ってたし、友だちだっていないし、することないから公園に来たのかな、他にどこか行くところなんて知らないんだもんね。

なんか・・・ 罪悪感

なんで私が感じなきゃいけないの！

お父さんがどこかに連れて行ってあげればよかったんじゃない！

帰ろう！

「お嬢さ——ん！」

ゲッ

ア、アイツがニコニコして手を振って、こっちに走ってくる――！

に、逃げようと思っても、あんまり突然で金縛り状態。

お願い、頼むから、手を振るのだけはやめて！

みんながヘンな顔して見てるじゃん！

ちがうんです！ アイツとここで待ち合わせしてたとか、久しぶりの感動の再会とか、  
そんなんじゃないんです――！

・・・って、心の中で叫んでる私と、もう目の前に立っているアイツ。

「お嬢さんもここに来てたのかあ」

コクンてうなづくしかできない。

「だよなあ、天気いいもんなあ、家ん中にいるのはもったいねえよなあ」

それは・・・イヤミ？

「なんか俺、すげえ嬉しい」

あ、そう・・・ニコニコして確かに嬉しそうだけど。

「天気いいからさ、ブラブラ歩いてたんだけどさ、どこ行ったらいいかわかんなくてさ。

あんまし遠くまで行っちゃうと道わかんなくなりそうだしさ。

この年で迷子なんてカッコつかねえよな、ハハハ」

思わずつられて笑いそうになっちゃった、マズイマズイ、コイツのペースにはまるどころだった。

「そんでこに来たんだけどさ。な～んかみんなカップルとか親子づれでさ。

おいおい、俺ひとりかよ～って思ってたら、お嬢さんいたからさ」

なんで・・・こいつ・・・私と同じようなこと思ってるの・・・

「なんかすげえラッキーって思うじゃん」

ニコニコしてそう言ってるコイツ、なんか、今は・・・そんなにイヤじゃない。

きっと私も、どこかでちょっぴり、ほんのちょっぴりだけ、コイツの顔見てホッとしたのかも。

「これってさ、運命の出会いっての？」

前言撤回。

「それじゃ」

相手してた私がバカだった。

「ちょ、ちょ、ちょい待ってよ」

な、ちょ、腕、私の腕、つかまないで――！

「な、なんなのよ？」

手でコイツの手をバシッてはらってやったよ、もうっ、つかむ？ 腕、突然だよ？

「お嬢さん、腹減ってないか？」

「ハ？」

「一緒にメシ食いに行かないか？ 俺おごるからさ」

私はあんたにおごって欲しくないし、一緒にご飯なんか絶対に食べたくないっ。

「お腹空いてないから、それじゃ」

って、公園の出口に向かって速足で歩きだす私と一緒に速足でついてこないでよ！

「そんじゃ何か飲むか？」

しつこい。

「私、帰るから」

「そんじゃ俺も一緒に帰るよ」

「ひとりで帰るから」

「いいじゃん、どうせ同じ道なんだからさ」

それはあんたが私の家に居候してるからでしょ！

「それに、お嬢さん一人で歩いてて途中で具合悪くなったら心配だしさ」

ハ？

「なんで私が具合悪くなるのよ？」

「だって、ほら・・・アレ・・・だろ？」

ゲッ

た・・・ たしかにそうは言ったけど、あんなのウソだってミエミエじゃん。

それとも、本気にしてるの？ やだあ！ 逆にやだあ！

私が今アレだってコイツが思ってるなんて、やだあ！

「ジュース！」

え？ なんで？ 私、なんでジュースって言った？

「ジュース飲みたいか？」

「え・・・ あ、まあ・・・」

「どっかサテン入ろうか？」

それはイヤ！

「えっと、あ、そこの、自販機ので・・・ いい」

「よっしゃ！ 何飲んでえ？」

「え、（べつに飲みたくないけど）炭酸じゃないやつなら・・・なんでもいい」

道路脇の自販機目指して走ってくアイツ。

私、なにやってんだろう。

なんかアイツのペースにハマっちゃってるっていうか、

なんでアイツがジュース買ってるの待ってるんだろう、逃げ出したっていいのに。

なんか調子狂うっていうか、今までアイツみたいなのと会ったことなくて・・・

ニコニコしながら、アイツが私にレモンティーの缶を渡す。

アイツはコーラ。

いいけど。

缶のレモンティー飲みながら、なんで私はコイツと帰り道を歩いてるの？

コイツってさあ、一緒にいても全然気が張らないっていうか、あたりまえだけど。

いちおうさ、男子じゃん？ 高校生の、まあそれもいちおうだけど。

恋愛感情まったくなくても、同級生の男子とか先輩と二人きりだとなんか気使っちゃうけど、

コイツだとぜーんぜん気を使わない、てか、気を使う必要性がどこにもないんだけど。

あれから一言も口きいてないのに、な——んとも思わないんだよね。

まあコイツと話すことなんてないけどね。

「アカリ」

ン？ 今…… コイツ…… 名前呼んだ？ しかも呼び捨て？

「って名前、可愛いよな」

ごまかした？ なに？ どうでもいいけど、また呼び捨てにしたらぶん殴ってやるっ。

「アカリ……」

また呼び捨てにしやがったあ！ もうゆるさ

「って、誰がつけたの？」

そんなこと知ってどうするのよ？

「お父さん」

「へえ、社長センスあるなあ」

センスなんかないよ、あの親父にはねっ！

「アカリ」

次はなにっ？

「次の質問はなに？ 私の名前の何をそんなに知りたいわけ？」

「いや、今は…… ちょっと…… 言ってみただけ」

ハァァァァアッ？

「あ、いや、呼んだんじゃねえよ、ア・カ・リって、声に出してみただけっつうか」

「出すな！」

「ブッ アハハハハ」

「なんで笑うのよっ？」

「アカ、じゃねえ、お嬢さんはおもしれえなあと思ってさ」

「おもしろくないっ！」

って言ってるのに、また笑ってる。

ムカつく————っ。

やっと家に着いた。

すっご——い長い時間に感じたよ、コイツと歩いてるとさっ。

「ごちそうさまっ」

飲み干した缶をアイツの胸元にグイッと押しつけて、玄関のドアを開けた。

「お嬢さん」

今度はなにによっ？

「なにっ？」

「また一緒に遊ぼうな」

ハ？

ニコニコしてそう言って、アイツは離れの方に歩いていった。

一緒に遊ぶ？ またって、一緒に遊んでないけど？

缶ジュース飲んで歩いただけだけど？

意味わかんない。

いいけど。

## 5.風邪

---

「え～、そんなあ」

力のない声で、私はベッドの上で抗議するよ、するでしょ。

アイツが来てから二回目の日曜日。

私は風邪で38.5度の熱を出してダウン。

娘が病気で寝込んでるのに、お父さんとお母さんは出かけるっていうの？

「しょうがないでしょ、仲人なんだから、行かないわけにはいかないわよ」

そうだけどお、なんで私がこんなときに結婚式なんかあるのよお。

大安吉日・・・ こんな日に風邪ひく私って大凶だよおお。

「だいたいおまえも、なんでこんな天気の良い季節に風邪なんか引いたんだ？」

知らないよ！ 引きたくて引いたわけじゃないよ！

お父さんなんかなくていい！ さっさと結婚式行けばいいでしょ！

「とにかく、お薬は飲んだんだから、じきに熱も下がるわよ。おとなしく寝てなさい」

「うん・・・ 何時頃帰ってくるの？」

「6時過ぎにはなるな」

お父さんなんかずーっと帰ってこなくていいよ！

そんな遅くまでこんな私を一人きりにするなんてえええ。

熱でボーッとした頭。

たったひとりでこの家にいる。

なんか心細いな・・・。

氷枕の氷もすっかり溶けて、額のタオルもぬるくなっちゃったけど、取り換えに立つ元気もないよ。

もういいや・・・ どうでも・・・

コンコンてノックする音、お母さん？ やっぱり心配で帰ってきてくれたの？

「お母さ～ん」

「あ、いや、あの、カズオだけど」

カズオ？

ああ・・・ アイツか・・・

そっか、アイツもいたのか・・・ 日曜日だもんね・・・ どうでもいいけど。

「お嬢さん」

返事するのもダルいんだよおお・・・

「・・・なに？」

「奥さんから、アカ、あの、熱出してるからって」

お母さんさあ、もう、余計なこと言わなくていいよお。

アイツに何ができるのよお。

「入っていいかな？」

えええ・・・ やだあ・・・

ガチャッてドア開いたよお・・・ 入っていいって言ってないじゃ～ん・・・って言う気力もないよお。

「まだ熱あるのか？」

返事する元気もなくて・・・

え、ちょ、な、なに、やだ、私の額にあんたの手あてないでよ。

「やっぱ熱いな」

熱いよ・・・ あの薬効かないよ、お母さ～ん・・・

あ、ちょ、や、やめて、氷枕、指で押さないでよ、水が波打ってクラクラするよお。

「すっかり溶けちゃってるな」

溶けるよお・・・ 熱あるんだも～ん・・・

「氷入れてくるから」

なっ、ちょっ、私の頭、抱えないでよ、起き上ろうとしたらグラングランするううう。

「すぐ持ってくるからよ」

どうでもいいけどお・・・

キッチンの方から、カランカランて氷の音がする・・・

なんでアイツなんかに・・・って思う気持ちと、氷枕作ってる音でホッとしてる・・・

ひとりじゃないんだなって・・・ 人の気配が・・・ アイツの気配が・・・ 相当弱ってるよ、私・・・

氷枕持って、ノックもしないで入ってきたけど、今はどうでもいい・・・

アイツが私の頭をまた抱えて氷枕を置いて、またそっと私の頭を置いたけど、どうでもいい・・・

ハアアアア・・・ 冷たくて気持ちいい・・・

あれ？ 部屋の中・・・ 薄暗い・・・ 今何時？ あ、なんだか頭が軽くなってる。

もう5時？ どんだけ寝てたの？ でも、なんか楽になってる。

熱は・・・ 37度ちょい、平熱まではいかないけど、ずーっと楽だあ。

なんかお腹空いてきちゃった。

朝は食欲なんて全然なかったから、何も食べてないんだよね。

キッチンに行って何か食べられるもの見つけてこよっかなあ。

あ・・・ 立ち上がると、まだクラツとする。ずっと寝てたしね。

「お嬢さん」

ドアの向こうからアイツの声。

なに？ もうかなり熱下がったから、もういいよ。

でも・・・

「起きてるよ」

ドアを開けたアイツは土鍋が乗ったお盆を持っていた。

「どうだ？ 少しはいいか？」

「うん」

「熱は？」

ヤツの目の前に、さっき測ったばかりの体温計を突き出して見せた。

「オ！ かなり下がったな」

嬉しそうに体温計を覗いてるアイツの顔・・・ なんだろう・・・ なんか・・・

「腹へってねえか？」

「少し・・・」

「お粥作ったんだけど、食べられるか？」

へ？ 作ったって・・・

「あの、（あんた・・・はマズイか）えっと、（指さしたよ）作ったの？」

「ああ」

ああって、当然みたいに言うけどお、人間が食べられるものなのお？

「心配すんなって」

エッ？ 私、声出してないよね？

「じっちゃんによく作ってたからさ」

そ、そう？ まあ・・・ それじゃ少しだけ・・・

アイツが土鍋の蓋を開けると、ファ〜ッと湯気がたって、すごくいい匂い！

お茶碗に盛ってくれたのを一口・・・ わっ

「美味しい！」

ちょうどいいカンジで柔らかくて甘い！

「美味しい！」

二度も言っちゃったけど、だって本当に美味しいんだもん。

お粥って、あんまり好きじゃなかったけど、これは・・・

「美味しいよ」

三度目だけど、だって、コイツがこんなの作れるなんて、ちょっと見直しちゃったよ。

「なんか、嬉しいな」

アイツは照れくさそうに笑ってるけど、美味しいよ。

でも・・・さ、食べてる横でそんなにジューツと見られてると・・・

「食べにくいんだけど」

「もっと小さいスプーン持ってくるか？」

「じゃなくて、ジーツと見られてると・・・ 食べにくい」

「あ、そ、そっか、ほんじゃ、あっち行ってるよ」

って立ち上がって・・・

「あ！ あの、いいよ、いても」

え？ なんでこんなこと言っちゃったんだろ？

「マジ？」

「え・・・ あ、うん、えっと、私の机のところで雑誌でも見てたら？」

「いいの？」

「うん、まあ・・・ 食べてるところ見ないならね」

「見ない見ない、見ないから、ゆっくり食べるよ」

そう言って、アイツはそ〜と私の椅子に腰かけた。

「アカリちゃんは、ここで勉強してんだなあ」

って、本棚見上げてるけど、今アカリちゃんて言ったの気づいてないみたい。

いいけど。

「スグゲー！ 英語の本ばっかじゃん。アカリちゃん、英語、あ、お嬢さん、英語得意なの？」

今のは気がついたんだね。

「得意っていうか、好きだけどね」

「すげえなあ、俺、英語全然ダメ。いっつも赤点ばっか」

笑ってていいの？

あ、そういえば・・・ 初めて会ったときのTシャツ！

「ねえ、ピースのスペル言ってみてよ」

「ぴーす？」

「平和のピース」

考えてる考えてる、眉間にしわ寄せて必死に考えてる顔が笑える。

「えっとお・・・ ぴーすだからあ・・・ ぴー・・・ あ！ P・E・E・S！」

PEESって・・・

「プッ アハハハ」

「ちがう？ あれ、P・・・ あれ？ ピーだからP・E・E・・・」

「カズオくん、それは、アハハハ、PEEは・・・ オシッコって意味だよ」

「へ？ オシッコ？」

そのマヌケな顔がおかしくて笑いが止まらないじゃーん、ハハハハ

「なんだそうかよ、オシッコかあ」

アイツも笑った。

「ヤッベえよ、外人さんに言ったら怒られちゃうよ、なあ？」

私は、コイツが“PEES!”って書いてあるTシャツ着て、外人の前でニコニコしてる姿が浮かんで

、  
ああもうダメ～、お腹痛い痛い ハハハハ

「んな笑うなよ」

って言いながら、ヤツも笑ってる。

ハアアア、やっと笑いがおさまったら、いっぱい笑ったからかな、気分までよくなった。

「なあ、なんでぴーすなんて聞いたんだ？ なんか意味あんの？」

「あんたがうちに来た日に着てたTシャツに“ラブ&ピース”って書いてたから」

「へ？」

「だけど、そのピースがPEACEじゃなくてPEASE、CがSになってたの」

「よく見てたなあ」

「そ、それは、あの、英語にはつい目がいくから、それだけ」

へ、ヘンな誤解、しないでよね。

「俺、な～んも気づいてなかったもんなあ、安かったから買っただけでさ」  
だと思ってたよ。

「やっぱアカリちゃんは頭が、あ、いや、お嬢さんは頭いいなあ」

「いいよ」

「ン？ なんか飲みたいか？」

「じゃなくて」

なんていうか、だから・・・

「お嬢さんじゃなくて、アカリちゃんでもいいよ」

「え？」

「だ、だって、氷枕換えてもらったり、お粥作ってもらって、お嬢さんなんて呼ばせてたら、  
なんか、私、イジワルなお嬢さんみたいじゃん」

「イジワルなんかじゃねえよ、俺がやりたくてやっただけなんだからさ」

「だったら、やっぱりお嬢さんて呼ぶ？」

「え・・・ それは・・・ できれば～、アカリちゃん・・・て呼びてえなって」

「じゃ、いいじゃん、それで」

私はふくれっ面みたいな顔してツーンってカンジで・・・

だって、コイツにアカリちゃんて呼ばれるのが、なんか、そんなにイヤじゃないっていうか・・・

「アカリちゃん」

「え？ なに？」

「呼んでみただけっス」

「用もないのに呼ばないで！」

アイツは私に怒られてもニコニコしてる、へんなの。

いいけど。

「ただいまあ」

玄関の方からお母さんの声がした。

「おっかえんなさーい！」

あいつが玄関の方に走っていった。

「アカリ、どう？」

お母さんが部屋に入ってきた。

「あら、それどうしたの？」

お粥の土鍋を見て・・・ そりゃ聞くよね。

「作ってくれたの」

「カズオくんが？」

「うん」

「まあ！　すごいわねえ」

お母さんのよりずっと美味しかったよ・・・とは言えないけど、本当だけどね。

「アカリ、どうだ、少しは具合よくなったか？」

お酒で赤い顔したお父さんも入ってきた。

やだあ、お酒くさいよお。

あ・・・ 廊下にアイツがいる。

「それがね、お父さん、カズオくんがお粥作ってくれたんですってよ」

「ほう！　お母さん、これなら今度からカズオくんにアカリの子守してもらって、俺たちもデートできるな、ハハハハ」

酔っ払いのおっさんはもう出てってよお。

「なあ、カズオくん、これからもアカリの子守頼むよ、ハハハ」

「もちろんっすよ！　俺、いつでもアカリちゃんの子守しますから」

あんたも調子に乗ってんじゃないっつうの！

「カズオくんは、ご飯食べたの？」

「俺はテキト～にやるんで」

え？　まだ食べてなかったの？

私のお粥作って、自分の晩御飯は・・・

「折詰いただいてきたから、よかったらそれ食べてちょうだい」

「いいんスカ？」

「どうぞどうぞ、キッチンに置いておくから好きに食べてね」

「ありがとうございます！」

「ほら、お父さん、行きますよ」

お母さんに引っ張られて、や～っとお父さんも出てったよ。

ヤツが中に入ってきて、土鍋の乗ったお盆を持って・・・

「いいなあ、こういうの」

「なにが？」

「家族ってカンジでさ」

「家族は家族だけど」

「社長も奥さんも、アカリちゃんのこと可愛いんだなあって」

「にしては、お父さんは仕事でいないことが多いし、お母さんだって婦人会とか親戚の集まりとか

、  
私、小さい頃から一人で留守番してること多かったよ」

「マジで？」

「今日みたいに風邪ひいても一人で寝てたし、まあ病院に連れていってくれたりはしたけどね」

「淋しかったろ」

「それはまあ、そうだけど、一人っ子だからしかたないんだよね」

「アカリちゃん」

な、なに？ そのまじめな顔？

「安心しな」

ハ？

「俺いるからさ、社長たちがいないときは俺がいるから、絶対一人にしないから」  
ど、どうしちゃったの？

「なんかあったら俺に言えよ、俺、なんでもするからよ」

あんたにして欲しいことなんてないよ。

まあ、今日は・・・ 助かったけど。

「なんかあったら、絶対俺に言ってくれよ」

「あ、えっと、大丈夫だから」

なにこの真剣モード？

「慣れてるから、それに私、もう高校生だから、さっきのは小さいときの話で・・・」

「でもさ、やっぱ一人は淋しいじゃん」

ズキッ

なんか自分で意識してなかった思いを、コイツに見られた気がして・・・

「は、早く食べてくれば？ 折詰あるって言ってたじゃん」

「ああ」

ドアノブに手をかけて・・・ なに？ どうしたの？

「アカリちゃん、さっきさ」

さっき？

「なに？」

「俺のこと・・・ カズオくんて呼んでくれたじゃん？」

ハ？

いつ？ 呼んだっけ？

「すげえ嬉しかった」

ニコッて笑ってドア閉めたけど・・・

嬉しかったって言われるような呼び方した？ だいたいカズオくんて呼んだ？

なんかわかんないけど。

いいけど。

## 6.真夜中のコンビニ

---

もうすぐ夏休み！

・・・の前に、明日から期末試験。

これが終わらないと、私に夏は来ない、来ないどころか点数次第で特別夏期講習だよ。

もっと夏を楽しませてよ～！なんて言ってる場合じゃない。

初日の明日は物理と古文。

物理は・・・捨てた！ どう頑張っても平均点ギリだよ、いいよそれで。

古文は中間で下がっちゃったから、今回は頑張らないとマズイよ。

うちの学校、二年生でだいたいみんな第一志望の大学は決まってるんだよね。

私の志望校は古文あるからなあ。

進学校に入ったら入ったで大変なんだよ、お母さん。

自慢してる場合じゃないんだから。

・・・て、一年のときに思ったよなあ。

ダメダメ！ そんなこと考えてないで勉強しなきゃ！

よし！ これで明日の古文はイケる！・・・と思う。

あ、もう一時になっちゃった。

早く寝ないと。

あれ？ ン？ なんか・・・

トイレに駆け込んだ・・・ら、ウッソーーーー！

なんで今生理になっちゃうのおおお？

期末の初日に生理ってサイテーだよおお。

ウソ！ ない！ ナプキンがない！ 一枚もない！ なんでーーーー？

あ・・・ あーーーー！ 先月終わったときになくなって、買おうと思って忘れてたああ！

お母さんのは？ ない！ お母さ～ん！ 終わっちゃったのお？

終ってはないよ、先月もお母さんのがここにあったもん。

お母さんまで買うの忘れてない？ もうっ、こんなときにーーーー！

どうしよう、どうしよう、この時間じゃ近くのドラッグストア閉まっちゃってるし。

表通りのコンビニ？ それしかないよね。

でも、自転車でもけっこうかかるし、あそこまでの道って暗くて怖いんだよねえ。

あの道ってよく痴漢が出るんだよ、この前も出たって誰か言ってたし・・・ イヤだなあ。

トイレトペーパー分厚く重ねて、明日の朝学校行く前に買う？ ムリ～、すぐ漏れちゃう。

やっぱり買いに行かなきゃ。

でもなあ、やっぱり怖いよお。

あ！ アイツがいる！

ついてきてもらう？

って、なに考えてんだよ、私。

アイツだっていちおう男なんだから、「生理ナプキン買いに行くのつきあって」なんて言えないよ。

でも、そんな場合じゃない！ 緊急事態だもん！ 頼むしかない！

そうだよ、アイツ言ったじゃん。

「なんかあったら俺に言えよ、俺、なんでもするからよ」って。

その「なんでも」に生理ナプキン買うことは含まれてなかったとは思うけど、

てか想像もしないよね、まさか生理ナプキンなんて・・・って、そんなこといい！

とにかく、アイツだ！

裏口の横の離れの窓は真っ暗で・・・ 寝てるよね、寝てるよそりゃ。

でもね、でも、起きてもらわないと困るの————！

コンコン

反応ない。

ドンドン

物音ひとつ聞こえない、爆睡してるよお。

「カズオく——ん！ 寝てる——？（寝てるよ）」

ダメだ・・・

しょうがない、一人で行くしか ドンッガラガラガッシャー

な、なに？ あ、窓から灯りが・・・ 起きた？

「あいっ・・・ あ、ちょっ、ちょっと待って」

起きたばっかですって声が中から聞こえて、ドアが開いた！

「ア、アカリちゃん？」

寝ぼけ眼でビックリした顔してるけど、髪の毛寝ぐせでおっ立ってるけど、

それどころじゃないのおお！

「ど、どうした？ なんかあったんか？」

誰か死んだのかくらいの顔してるけど、そうなるよね、こんな真夜中にたたき起こされればさ。

「アカリちゃん、どうした？」

「ついてきて」

「あ？ いいよ」

即答？ いいよっていいの？ よくなきゃ困るけど。

「どこ？」

「コンビニ」

「コ、コンビニ？」

わかるよ、そのポカンな顔。

夜中にたたき起こされてコンビニについてきてって言われても理解できないよね。

でもね、もっと理解できなくなるから、落ち着いて聞いてね。

「あのね」

いくらコイツでも、これ言うの勇気いるけど

「急に、急になっちゃったの」

「な、なっちゃった？ な、な、なにに？」

だよな？ わかんないよね、説明するけど、言うけど、

次の言葉を言うのに、どれほど勇気がいるかわかって！

「せ・・・」

「せ？」

「生理！」

言ったよ！ もう言っちゃったよ、言うしかないんだもん！

「あ・・・ ああ！ ああ、うん、はい」

ああ、夜中にたたき起こされて生理になっちゃったって言われたコイツの心理・・・！

「ナ、ナプキンが・・・ ない！」

そして、ナプキンがないとコイツに訴える私の心理～っ！

「コ、コンビニに行こうと思ったんだけどあそこまでの道が暗くて怖くて痴漢が出たりするし  
だからあの一人じゃ・・・」

ここまで言って息継ぎしてなかったことに気づいた・・・ い、息が苦しいいい

「それで・・・」

「わかった！ 俺、買ってきてやるよ」

「あ、でも、私も行くから」

「俺が行ってくっから、アカリちゃん家で待ってるよ」

「でも、生理ナプキンとパンティライナーの違いわかる？」

「？」

言葉も出ないくらいポカンとしてるよ、するよね。

どこのメーカーのどれでもいいけど、パンティライナーはダメ、すぐ漏れちゃう。

メーカーと種類おしえればいいのかもしいけど、

夜中のコンビニで、コイツがナプキンコーナーで・・・ それはさせられない！

いくらなんでも、それって罰ゲームだよ、てか、もう拷問レベルだよ。

「私が買うから、カズオくんついてきて」

「わかった、ほんじゃすぐ着替えっからよ」

あ！ ヨレヨレのTシャツとトランクスだあ！ 見ちゃったよお！

い、今はそれはいい、それどころじゃない！

Tシャツはそのまま、多分あのトランクスの上にジーパン履いて、数秒で飛び出してきた。

「アカリちゃん、チャリ貸してくれよ」

「うん」

「俺が運転すっから、アカリちゃん後ろに乗んな」

「わかった」

私の赤い車体の自転車にアイツがまたがって、私も横座りで荷台に乗った。（漏れないで！）

「ちゃんとつかまってるよ！」

アイツはいっきにスピードあげた。

「カ、カズオくん！ 怖いよお！」

「つかまってるって！」

アイツの腰にまわした腕に、もっと力を入れてギュッとつかまった。

自転車が暗い町の中を風を切って走る。

わたしの自転車って、こんなに早く走ったっけ？

こんなにスピード出したことなかったよ。

なんかすごい、男子ってカンジで、なんか・・・ カッコいい・・・かも。

「アカリちゃーん！ 大丈夫かー？」

風に乗ってアイツの声が聞こえる。

「ダイジョーブー！」

風に負けないように私も叫ぶ。

遠くに見えていたコンビニの看板の灯りが、どんどん近づいて大きくなった。

無事にナプキンゲットして、レジで会計してもらってる時、コンビニの大きな窓から外を見ると、

アイツが自転車に寄りかかって夜空を見上げてた。

なんか・・・ ホットする。

アイツが外で待っていてくれると思うと、なんか・・・ ホットする。

外に出ると、アイツが自転車引きながらこっちに来た。

「あったか？」

突然・・・ 急に・・・ 今さら・・・ すごく恥ずかしくなっちゃったあ！

ナプキン買いに――！ アイツと――！ 今さらだけどおおお！

「アカリちゃん？ どした？」

なんかもう顔見れないから、袋から缶コーラ取り出して、アイツの前に突き出した。

「あ、あの・・・ お礼・・・」

「サンキュ！」

チラッと上目使いでアイツの顔見るとニコニコしてる。

気にしてない・・・ってこと？

だったら・・・ いいけど。

コンビニの袋（ナプキン入ってるよ！）と缶コーラを自転車のカゴに入れて、

アイツが自転車にまたがった。

私も、今度ははじめからアイツの腰にギュッと手をまわした。

すごいスピードで風を切って走る自転車で・・・

アイツの背中に顔をくっつけてると、なんだかすごーく安心して、

このままずっと走ってたら眠ってしまいそうな気持ち。

アイツが裏口のところに自転車止めて、私は荷台から降りた。

「そんじゃ、おやすみ！」

ニコツとしながらそう言って、離れの方に、あ、ちょっ、

「カズオくん！」

振り向いたアイツの顔・・・

この人は・・・ どうして・・・ 私が呼ぶと、いつもあったかい顔で振り向いてくれるの？

「どした？」

「え？ あ、えっと、ありがとう」

私が何か言うと、いつも今みたいにニコリするよね・・・

「楽しかったよ」

え？

「な～んかさ、アカリちゃんとデートしたみてえでさ、すっげえ得した気分だよ」

そんなこと言うなんて・・・ 想像もしてなかった・・・

「夜中に一人でコンビニ行くなよ、必ず俺に言えよ、危ねえからさ、な？」

「う、うん」

「んじゃ、おやすみ！」

なに・・・ このカンジ・・・ なんだろう・・・ でも・・・

「カズオくん！」

ほら、またあったかい顔で振り向いた。

「また乗せて」

「え？」

「自転車、カズオくんうまくて、すごく早くて、気持ちよくて、だから、えっと、おやすみ！」

裏口のドア、ボタンと開けてボタンと閉めた。

なんであんなこと言っちゃった？

なんで？

ダメダメダメ！ 明日から期末だよ、寝よう。

ファ～・・・ 眠いいい。

でも、5時間は眠ったから、今日の試験は大丈夫・・・だと思う。

「ファ～」

お母さんまであくびしてるって珍しい。

早寝早起きの人だから、朝はいつもイヤミなくらい元気なのにさ。

「アカリ、ファ～、あんた今日から、ファ～、期末よねファ～」

「そうだけど、どうしたの？ あくびばっかしちゃって、具合悪いとか？」

「お父さんが4時に出るから3時半に起きたのよ」

「へえ、仕事？」

「そうよ、現場が遠いところなんですって」

「ふうん」

あれ？ え？

「ねえ、カズオくんも？」

「なにが？」

「カズオくんも同じ現場？」

「そうよ、お父さんと一緒にササッと朝ごはん食べて出かけたわよ」

エーーーーー！

てことは、アイツ、1時間半くらいしか寝てないじゃん！

それであのキツイ現場に行ったの？

エーーーーー！ 言ってよお！ 明日は早いって・・・ 言うヒマなかった・・・よね。

たたき起こして生理ナプキンがないとか言われちゃって・・・ なんか罪悪感。

「カズオくんもがんばるわよねえ、来週からは期末試験も始まるんですってよ」

また自転車乗せてとか、バカなこと言って・・・

「ああああ、ごめん！」

「なに？ どうしたの？」

「え？ あ、いってきまーす！」

とにかく・・・ 試験だ！

## 7.明日の約束

---

やっと今日で期末が終る！

あとは次の倫社だけ。

ヒポクラテスもアルキメデスも、どうでもいいから早く終わって！

「山岸」

ユウジくん・・・！

「明日予定ある？」

って言いながら私の前の席にこっち向きで座ったあ！

「ないよ」

もしあったとしても無しにする！

「あのさ、明日文化祭のクラス出店の打ち合わせしようと思うんだ」

な～んだ、それかあ。

無理やりクラスの文化祭実行委員にさせられた哀れなメンバーの一人が私。

ユウジくんがいたから、引き受けたんだよ。

「俺の家でやろうって話になっちゃってさ」

「え？」

ユ、ユウジくんの家————？

「山岸も来れるよね？」

行く行く行く！ 何があっても行く！

「いいよ、何時に行けばいい？」

「10時からってことにしたんだけど、山岸、俺の家知らないよね？」

調べて行く！ どんなことしても行く！

「うん、知らない」

「それじゃ、俺が山岸の家に迎えに行くよ」

ウッソ——！ マジで————？ キャ————！

「そうしてもらおうと助かるけど、他のメンバーたちはいいの？」

「あいつらはしょっちゅう来てるから」

しょっちゅうなんていいなあ、男子っていいよなあ。

そうなんだよね、この実行委員たち、全員ユウジくんの友だちで全員男子。

で、なぜか私だけ女子、あいつらが無理やり「ヤマギシやってくれよ」って。

ユウジくんもいるし、ユウジくんの友だちだから断れなかったんだよ。

「9時半くらいに迎えに行くよ」

「うん、わかった」

冷静なふりしたけど、心臓ド————キドキだよ！

キヤーー！ ユウジくんが私のこと迎えに来てくれるなんて！  
ユウジくんの家に着くまでは二人きりだよ？ 考えただけで緊張しちゃう。  
今は「ありがとう！」って言いたい！ 無理やり私を実行委員にしたあいつらに！

明日は何を着ていけばいいの？

あんまりがんばっちゃってもヘンだし、なにげな〜くオシャレなカンジ？ それってどんなの？  
ユウジくんの好みってどんな服？

あんまり女の子の子してなくて、でも、ちょっとは女の子らしくて・・・って、どんな？

Tシャツとジーンズは・・・ ありえない！ ワンピースは・・・ やりすぎ！

このフレンチスリーブのブラウスに・・・ ダメだ、思いつかない！

コンコン

それとも、この白地に黒のドットのカットソーに・・・

「アカリちゃん」

え？ 誰？ 今それどころじゃ・・・ アイツだ！

すっかり忘れてた。

あの例のナプキンの夜以来会ってなかったよ。

私は期末でアイツは遠い現場の仕事だったから。

「入っていいよ」

ドアが開いて、久しぶりに見たアイツの顔は日焼けして、ちょっと、かっこよくなって・・・

いやいやいや、そうじゃなくて、ちょっと、ちょぴりね。

「アカリちゃんの顔見んのひさしぶりだなあ」

ニコニコするアイツの顔は・・・ やっぱりちょっとカッコよ・・・ いやいやいや、日焼けマジックだよ。

あ！ 私、謝らなきゃ！

「カズオくん、ごめんね」

「な、なにが？」

あ、そうだよ、全部吹っ飛ばしちゃってた。

「ほらあの、コンビニに連れていってもらった・・・ あの夜」

ナプキン買いに行った夜・・・とは言えない。

「次の日仕事早かったの知らなくて、ほとんど寝ないで仕事行ったんでしょ？」

「な〜んだ、そんなことか」

「ごめんね」

「ぜーんぜん平気だったの、体力だけはあっからよ」

まあ、今目の前に立っているってことは、元気ではあるってことだけど。

「んなこといちいち気にすんなよ、な？」

「うん・・・ でも、ごめん」

「だーから、あやまるなって。これからも、いつでもなんでも言ってくれよ、な？」

「うん・・・でも・・・」

「またナプキン買うときも連れてくからよ」

「ちょ、そ、それ、あんたね！」

笑ってるけどねっ

「けっこう恥ずかしかったんだから！」

「俺は平気だよ」

「あーっそ！ だったら次はあんたに買いに行かせるからね！」

「了解っス！」

「パンティライナー買ってきたら首しめてやるからね！」

「わかった！ アカリちゃんが使ってるの、ちゃんと調べとく！」

「やめてよっ！ ヘンタイ！」

「や〜っといつものアカリちゃんらしくなったな」

「なにそれ？」

ニコニコしてるけど、私らしいってなによ？

いいけど。

「あのさ・・・」

「なによ？」

「明日、ヒマ？」

明日はユウジくんの家に行くの。

「出かけるけど、なんで？」

「そっか」

「なんで？ 何かあるの？」

「いや、べつに、なんもねえよ」

あ・・・ 私がまた自転車に乗せてって言ったから？

明日はムリ！ 何があってもムリ！

「んじゃ、おやすみ」

いつもみたいな顔でドア閉めたけど・・・ なんか・・・ なんかヘンだなあ。

でも、私はそれどころじゃないの。

何着ていけばいいのおおお？

白地に薄いピーチ色の小さなドット柄のノースリーブのワンピースで立ってるんだけど。

ワンピースはやりすぎかなって思ったけど、フリフリがついてるわけじゃないし、

裾がフワフワでもないし、ストーンでカンジだから・・・ いいよね？

あ、来た！ 来た来た来た―――！

「おはよう」

私服のユウジくんを見たのは初めて。

スタンドカラーの白い半袖のシャツにブルーグレーのカジュアルパンツ。

んも〜、オシャレすぎるうううう。

ユウジくんと二人だけで歩いている。

肩がスレスレに近づきそうなほどで・・・ ユウジくんの柑橘系の香りが・・・

よかった、コロンつけてきて・・・ ユウジくんの好きな香りだったらいいな・・・

「あ、山岸、ちょっと止まって」

「え？」

ユウジくんが私の前に立って・・・ 髪の毛に触ったあああ！

か・な・し・ば・り状態　なんですけどおおお！

「髪に葉っぱがついてる、ちょっと待って、取るから」

もう失神しそうなんですけどおおお。

ユウジくんの肩越しに・・・ 通りの向こう側をボーッと・・・ あれ？ え？ アイツ？

コンビニの袋持って・・・ こっちを見てる・・・ 見られた・・・

なんか、思わず視線そらしちゃった。

なんで？ 関係ないじゃん、アイツに見られたって。

アイツとはなんの関係もないんだから。

「取れたよ」

そう言って微笑むユウジくんの顔を見たら、アイツのことなんか一瞬で消えたよ。

消えた？　なんだろ、なんか頭の後ろの方にアイツが・・・

「こっちだよ」

ユウジくんの声で、消した、だって関係ないんだもん。

ユウジくんと時間を大切にしたいの！

## 8.失恋とカップと自転車

---

重たい。

胸の真ん中。

鉛が入ってるみたいに重たくて。

どうやって帰ってきたのかも憶えてない。

部屋に戻って・・・ ワンピース脱ぎ捨てて・・・ バカみたい、こんなの着ちゃって・・・

こんなの私が着たって意味なかったんだよ・・・

私なんか・・・

ユウジくんの部屋で・・・

最初は文化祭のクラス出店の話してて・・・

誰だっけ？ 言ったんだよ・・・

「ユウジ、マリコも誘えばよかったじゃん」

マリコ？ ああ、佐藤さん？ あんまり話したことないな、ほとんどない。

「今日は実行委員の打ち合わせだから」

ユウジくん、佐藤さんがどうしたの？

「そんなこといいじゃん、みんな知ってるんだからさ」

なに？ 何を知ってるの？

「さ、佐藤さんが・・・ どうしたの？」

「あれ？ ヤマギシ知らなかったの？」

「やめろよ、山岸はそういう話嫌いだよ」

そういう話？ 私が嫌いってどういうこと？

「だよなあ、ヤマギシって、恋愛とかつき合うなんてガキっぼいって思ってるんだろ？」

恋愛？ つき合う？ なに？ どういうこと？

「べ、べつに、そんなこと思ってないよ、てか、話が見えないんだけど」

私は無理やり微笑んで・・・

「知らなかった？ ユウジとマリコがラブラブだって」

えっ

「やめろって」

ユウジくんの顔が・・・ 赤くなってる・・・

「ヒュー、照れてやんの、今さら照れることないだろ」

佐藤さんと・・・ユウジくんが・・・

佐藤さんは・・・ 背が低くて、ちょっとポッチャリしてて、いかにも女の子ってカンジで、なんだかいつも頼りなさそうにしてるから、男子がいつも・・・

佐藤さんのお弁当袋・・・ ピンクのハート・・・ ハンカチもピンクのレースがついた

やつ・・・

似合ってるけど・・・ この学校の女子にしては女の子っぽすぎるくらい・・・

「最初は俺たちが、マリコも実行委員にすればいいじゃんって言ってやったんだけどさ」  
そうだったの？

「ユウジが、こういう仕事はヤマギシが適任だって言ってさ。

確かに考えてみればマリコは頼りないしなあ」

「おまえに言われたくないよ」

ユウジくんが・・・ 佐藤さんをかばってる・・・

「ユウジの言うとおりのヤマギシで正解だったよ」

正解・・・ 何の正解なの？

「山岸はおとななんだよ、感情的にならないから話しやすいし」

ユウジくんの言葉が・・・ 頭の上の方を通り過ぎていく・・・

「だよな、他の女子ってさ、気使っちゃうんだよなあ」

つまり・・・ 私は・・・ 女子だと思われてないんだ・・・

ユウジくんにも・・・

だって・・・

ユウジくんが好きなのは、私と正反対の女の子。

その後のことは憶えてない。

私は冷静なふりして・・・ でも、何を決めたのかどうなったのか・・・ 全然憶えてない・・・

泣きたい気持ちが胸の奥の奥の方にあって、泣きたいのに泣けないから苦しい。

明日・・・ ふつうの顔して学校に行けるのかな・・・

吐きそう・・・

ユウジくんの家を出されたジンジャーエール、ムリして飲んだから・・・

バカみたい、炭酸ダメなのに、ムリして・・・

紅茶飲もう。

キッチンのドアを開けたら アイツがいた。

浮かれてた私を 見てたんだよね

アイツの顔を見ないようにして、戸棚から紅茶の缶を出して、それから・・・

「アカリちゃん、昼メシ食ったか？」

食欲なんかあるわけない、それにもう3時だよ。

お昼も・・・ みんなでファミレス行こうって話になったけど、私は用があるからって帰ってきた。

あれ以上一緒にいたくなかった・・・ いれなかった・・・

「アカリちゃん、晩メシ何食いてえ？」

晩メシ？ なんでコイツが・・・

あ・・・ そっか・・・ お父さんはゴルフで、お母さんは伯母ちゃんの家に行くって・・・

晩ご飯は適当に食べてちょうだいって・・・

「親子丼好きか？」

紅茶飲んで・・・ 寝よう・・・ なんか疲れた・・・

「俺、けっこう得意なんだぜ、親子丼」

泣きたいほど苦い苦い紅茶飲んだら・・・ そしたら泣けるのかな？

泣きたいとも思わない、今はもう・・・

「アカリちゃん？」

バカみたい、一人で勘違いして、一人で浮かれてただけじゃん。

「アカリちゃん、どうした？」

アイツが私の腕をつかんで・・・

「具合でも悪いんか？」

心配そうな顔して私のこと見てるけど・・・

「べつに」

あんたに関係ないよ。

「なんかあったんか？」

紅茶の入ったマグカップ持って、キッチンのドア開けて・・・

「あんたに話すことなんか何もない」

バタンとドア閉めた。

「アカリちゃん！」

アイツが飛び出してきて、私の腕をつかんだから、カップ落としちゃって、床に落ちちゃって、熱い紅茶が私の足に、アイツのジーパンにかかっちゃって

「なにするのよ！」

大声で叫んでた。

ただカップが落ちただけなのに、もっとひどいことされたみたいに叫んでた。

「ご、ごめんよ」

アイツがかかんでカップを拾ってる。

「ヤケドしなかったか？」

アイツは自分の首に巻いてたタオルで私の足を拭こうと

「やめてよ！」

ヒステリックな声になっちゃって、足引込めて

「かまわないで！」

「でも、ヤケドしてっかもしんねえし」

「私にかまわないで！ 放っというて！」

自分の部屋に向かって走り出して

「アカリちゃん！」

アイツが私の腕をつかんだ。

「放してよ！」

私の腕をつかんでるアイツの手を振り払おうとしても

「放してってば！」

アイツは手を離そうとしない

「なんなのよ！ 放してよ！」

「アカリちゃん、なんかあったんか？」

「ないよ！」

「あったんだろ？」

「あんたに関係ないでしょ！」

「何があった？」

「ないってば！ 放してよ！」

「言ってくれるまで放さなねえ」

「何もないって言ってるでしょ！」

「アカリ！」

一瞬でアイツに抱きしめられてた。

「ちょ、な、なにすんのよ！ 放して！」

必死にもがいても、すごく強い力で

「放してってば！ あんたなんか大嫌い！ 放して！」

あいつは私のこと抱きしめたままで

「大嫌いって言ってるでしょ！ 放して！ イヤ！ 放して！」

言葉とは裏腹に・・・ なんか・・・ やだ・・・ 身体の力が抜けていって・・・

だって・・・ コイツ・・・ なんにも言わないで・・・ 私のこと抱きしめたままで・・・

私の頭を優しくなでて・・・ 子どもの頭をなでるみたいに・・・

子どもじゃないよ・・・ 子ども扱いしないでよ・・・

「子どもじゃ・・・ ないんだから・・・」

って言った途端に涙がポロポロ出てきて、そして、声をあげて泣いちゃって、止まらないよ・・・

・

止まらないよ、子どもみたいに、アイツの腕の中でワンワン泣いて、止まらないよ・・・

泣いて泣いて泣いて、頭がボーッとするくらい泣いて・・・

なんか、ちょっと、心の中が軽くなって、涙が出なくなって、ヒクッて、子どもみたいに・・・  
顔をあげたら、アイツがいつもみたいなあったかい目で私のこと見てるから、  
なんかちょっとムカついて、アイツのTシャツで鼻かんでやった。

アイツは笑った。

笑ってるだけだった、いつものあったかい目で。

私の部屋。

床に座って、ベッドに背中つけて、泣きすぎて疲れちゃって、あいつの肩に頭もたれて、  
あいつはときどき私の頭をなでて、子どもじゃないのにさ。

でも、なんかホッとするから・・・ いいけど。

こうやってると、なんかバカみたいに思えてきちゃった。

あんなに泣いたことも、ユウジくんのこと、なんかどうでもいいっていうか・・・

「私さ・・・」

アイツの肩に頭をもたれたまま

「ン？」

アイツは私の頭をなでながら

「失恋しちゃった」

「へ？」

アイツの手が止まった。

「へってなによ？」

「あ、いや、そ、そっか」

「失恋にもならないよ、だってカノジョいたんだもん」

「それって・・・ あの・・・」

そうだよ。

「あんたが見たあの人！」

「えっ・・・」

「あんたが見てたの知ってたもん」

「あ、いや、あれは、なんつうか・・・」

「いいよべつに、もう終わったことだし、ていうか、始まってもしなかったし」

「でも・・・ 悲しかったんだろ？」

「それは・・・」

「あんなに泣くほどさ」

「そ、それは、あんたが、私の腕引っ張ってカップ落として熱くて、だから、あの」

「ムリすんなって」

「ムリなんかしてないよ！ 私が泣いたのは、あんたが私の・・・ そうだよ、あんたのせい

だよ！」

「お、俺？」

あんたがギュッと抱きしめて・・・ 頭をなでたから... だから・・・

「私が泣いたのはね、ホントにホントにあんたのせいなの！」

「お、俺、なんかしたか？」

言えないよ、あんたの腕の中が・・・なんか・・・ホッとして・・・それで・・・なんて・・・

「わかんないなら、もういい！」

バツと立ち上がってベッドの上にドスンと座った。

「アカリちゃ〜ん、怒んなよお」

アイツがそう言って私の隣りに座ったけど？ 顔は笑ってるんだけど？

「フン」

背中向けてやった。

「ア・カ・リ・ちゃん」

指で私の頭をトントントンて、もうっ！ 無視！

ヒッ

う、後ろから・・・抱きしめられちゃって・・・ドキドキドキドキなにこれなにこれなにこれ

ア、アイツだよ？ な、なんでドキドキしてるの？ アイツじゃん・・・

背中に・・・アイツの心臓のドクドクって・・・な、なんか、クラクラしてきちゃって・・・

「じ・・・自転車！」

なに？ なんで私こんなこと言った？

「自転車、の、乗りたい！」

よくわかんないけど、なんか、まあ、いいや。

アイツが私のこと抱きしめたまま、私の顔見るから、ドキドキドキドキ ち、近いよ・・・

「乗るか！」

アイツがニコッと笑った。

私の赤い自転車が、夕暮れの町を風を切って走る。

アイツの腰に腕をまわして、背中にもたれかかると、なんだかすごくホッとして、ユウジくんのこと、重たかった心も、風の中に消えていく。

風に髪がなびいて気持ちいい！

アイツのあったかい背中が気持ちいい！

「アカリ——！」

アイツの声が風に乗って聞こえてきて

「なあに――？」

風に消されないように大きな声出して

「のど、乾いてねえか――？」

「乾いた――！」

「よ――し！」

道路沿いの自販機の前に自転車を止めて

「アカリ、何飲みてえ？」

「なんでもいいよ」

なんか・・・ 前にもこんなことあったな？ いつだっけ？

「ほい！ 炭酸じゃねえやつ、だよな？」

あ！ 最初の日曜日だ！

てか、私が炭酸じゃないのって言ったの憶えてたの？

自販機の傍のバス亭のベンチに座ってレモンティー飲んでると（アイツはいつものコーラ）、バスが停まって、運転手さんに乗りません乗りませんて手を振って、また走ってくバスを見て・・・

「アカリと、どっか行きてえなあ」

バスの後ろを見たままアイツが言うけど・・・

「どこ？」

「アカリが行きたいところ」

「じゃ、ニューヨーク」

「ニューヨークはバスで行けねえだろ」

アイツはそう言って笑って・・・

「もっと、なんつうかさ、ほら、えっと、あ、海とかさ」

「泳げないもん」

「マジか？」

「悪い？」

ツンてしたら、あいつがまた笑って・・・

「そんじゃ俺がおしえてやるよ」

「泳げるの？」

「ったりめえじゃん！」

「悪かったね！ あったりまえに泳げなくて！」

フンて顔そむけたら、アイツが私の肩に腕をまわして・・・

「だから～、アカリには俺がおしえてやっからさ」

な・・・なに・・・ この腕・・・ いいけど・・・

「そうだな、夏だもんな、アカリと海、いいなあ！」

「ねえ」

「ン？」

「いつから、“ア・カ・リ”になったわけ？」

「あっ・・・」

「私、“アカリ”って呼んでいいって言ったっけ？」

「ご、ごめん、あの、ごめん」

すまなそうなアイツの顔がおかしくて

「いいよもう、アカリで」

「マジ？」

「だってもうそう呼んでるじゃん」

「ヤッタ！」

なんでこんなことで、そんな嬉しそうな顔するの？

「俺のこともカズオでいいよ、カズオくんなんて柄じゃねえしさ」

「あんたの名前なんか一生呼ばない！」

「へ？」

「呼んでやらないよ、カズオだなんて」

あいつの顔がちょっとションボリしておもしろい

「私は一生あんたの名前なんか呼ばないからね！ わかった？ カズオ！」

一瞬でアイツの顔がニコニコになった。

アイツのTシャツの胸元の“LOVE & PEASE”が私の鼻水でカピカピになってるけどね。

## 9.赤点

---

一週間でもう立ち直ってる私って・・・っていうか、全然ときめかないんだよ、ユウジくんのこと見ても、話をしてても。フツツってカンジ？

本当にユウジくんのこと好きだったのかなあ？ってくらい。

「山岸」

「なに？」

ほらね？ なーんにも感じない、他の男子と話してるのと同じ。

「帰りにファミレスで、実行委員でメシ食いながら話し合おうと思うから来るだろ？」

「私はパス」

「え？」

そりゃ驚くよねえ、今まではユウジくんの言うことには全部YESだったもんね。

「ユウジくん、私、実行委員おるる」

「えっ？ それは困るよ、クラスで5人で決まってるし、今になってそんなこと言うなよ」

「佐藤さんを入れればいいじゃん」

「マ、さ、佐藤は、こういうことは・・・」

「やってみなきゃわからないでしょ、勝手にできないって決めつけるのってどうかな」

「や、山岸、なんかいつもと違うよ？ どうしたの？」

「ほら、見なさいよ」

私は斜め後ろの佐藤さんの方を（佐藤さんには見えないように）指さした。

「ユウジくんが私としゃべってるだけで口とがらせてるよ」

そういうのが可愛いんだらうけど？

「え・・・」

ユウジくんが佐藤さんの方をチラッと見た。

「ね？ 実行委員に入れた方がいいよ。それに、私、本当はやりたくなかったの」

「え？」

「おとなぶって引き受けただけ、でも、ごめん、やっぱりやりたくない」

ポカンとしてるユウジくんにかまわず、カバン持って教室を出た。

あ——、サッパリした！

もうおとなぶる必要もないし、冷静なふりする必要もない！

私は私でしかいられないもん。

それでも私の傍にいてくれる・・・ えっと、なんでもない。

期末の結果はなかなかだったんだよ。

このままだと第一志望は大丈夫だろうって担任も言ってたし。

まだ二年生なのに大学受験意識しなきゃならないって、三年になったらどうなるの？

「アカリ」

カズオ！ 学校から帰ってきたんだね。

「いいよ」

ドアを開けたカズオの顔は・・・ なに？ なにかあったの？

「どうしたの？ 深刻な顔しちゃって」

カズオはチラッと私の顔を見て、言おうか言うまいかみたいな顔して、らしくないよ。

「なによ？ なんかあったの？」

「あのさ・・・」

「なに？」

「勉強・・・ 教えてくんねえか？」

「いいけど、でも、私、二年生だよ？」

「だから？」

「だからって、あんた三年生でしょ！ 私、高三の教科書やったことないよ」

「心配すんな、大丈夫！ アカリの方がぜ～んぜんレベル上だからよ！」

逆に心配になるよ！

「まあ・・・ やってみるけど」

「助かります！ お願いします！」

「拝まないでよ！」

「マジ、ヤベエんだよ」

「何が？」

「英語」

驚かないけどね。

「赤点取っちゃまってよ」

取りそうだから、それも驚かないけどね。

「そんで、追試受けなきゃなんなくてよ」

そりゃそうだ。

「その追試でも赤点取ったらよ」

追試でも赤点取るつもり——？

「俺・・・ ドベっちまうんだよ」

「ドベ？ なに、ドベって？」

「あ、落第」

ラクダイ・・・ 落第ってこと——？ エ———ッ？

「どうするの？」

「だ、だから、アカリに教えてもらおうと思って・・・」

「てかさあっ、期末の前に言えばよかったじゃん！ そしたら赤点取らなかった・・・かもよ！」

「うん、そうなんだけどな」

って情けない顔で笑おうとするけどさ。

「期末の英語っていつだったの？」

「先週の月曜」

先週の月曜日・・・ それって・・・ あれ？ あの日曜日の次の日？

あれ？ あの日の朝・・・ 「今日ヒマ？」って・・・

「カズオ、先週の日曜日、私の部屋に来たよね？ 今日ヒマ？って」

「ン？ そ、そんなこと言ったか？ 忘れた」

笑ってるけどさ、あんたってウソがクソヘタ！

「本当はあの日、私に英語教えてもらおうと思ったんでしょ？」

カズオの目が困ったようにあちこち泳いでるよ、もうっ。

「ちゃんと言ってくれたら、私、出かけな・・・」

出かけるの、やめたかな・・・

まだ失恋してなかった私が・・・

「んな、たいしたことじゃねえからよ」

「赤点でしょ！」

「あ、はい」

なのに、私はあの日・・・ カズオに八つ当たりして、泣いて、自転車に乗せてもらって・・・

次の日、カズオは大事な試験があったのに・・・

「なんで？」

「え？」

「なんで私のことばかりなの？ 次の日試験があるのに、そんなこと一言も言わないし、自転車に乗せて、勉強しなきゃいけないのに、なんで何も言ってくれなかったの？」

「あんときは・・・ 忘れてた」

「ハ？」

「アカリの様子がおかしかったし、すげえ泣いて、辛そうだったし、だから心配だっただけで」

「あんなのくだらないバカな失恋でしょ！ 今じゃもう忘れてるくらいのどうでもいいことでしょ！」

「あんときは、どうでもいいことじゃなかったらろ」

「どうでもいいことだよ！ カズオの試験に比べたらバカみたいなことだよ！」

「俺にはどうでもいいことじゃなかった」

「ハアッ？」

「アカリが心配だった、それだけだな」

「試験より？」

「うん」

あんたって・・・ あんたって・・・

「バカッ！」

「バカだから赤点取っちゃったんだけどよ」

笑ってる場合？ そうじゃなくて！

「そのバカじゃないよ！ そうじゃなくて、私のことなんか、もう放っておいてよ！」

「放っとけねえよ」

「放っというて！ あんたのこと振り回してばっかじゃん！

熱出したときだって、私のお粥作ってくせに自分の晩御飯は作ってなくて、

夜中にコンビニに連れてってて、次の日朝早かったのに、そういうの、全然気づかなくて、

あんたのこと振り回してるだけで、あんたのこと何も考えてなくて、私ってサイテー！」

「アカリ」

口に出したらますます自己嫌悪・・・ 私って自己中のサイテーなヤツ・・・

「アカリ」

「なに・・・よ？」

「英語、教えてくれよ」

いつものあのあったかい顔・・・

そんな顔見たら・・・ 私・・・

「うん・・・」

なんか・・・ ホツとしちゃうじゃん・・・ バカ。

## 10.特訓

---

追試まであと一週間。

えっと、まずは答案用紙と問題見て、どこが苦手なのか・・・って、なにこれっ？ 2点!?

逆に2点だけとる方がむずかしくない？

しかもこの2点で、選択問題で、これは絶対たまたま偶然当たっただけだ。

えっと・・・ あ！ ノート！ ノートを見れば・・・って、これ・・・ ノート？ メモだよこれ。

しかも、何をメモリたかったのかわからない謎の言葉がポツポツ。

「カズオ、これ、なあに？」

謎の暗号みたいなのを指さして、カズオに見せた。

「んっと・・・ なんだったっけかなあ？」

ダメだ、自分が書いたことさえわかってない。

英訳のノートなのに、訳がひとつも書いてないしね——っ。

「カズオ、板書は？」

「バンシヨ？ なんだそれ？」

「先生が黒板に書くでしょっ！ それをひとつも書いてないのはなぜっ？」

「あの先生、何言ってっか、よくわかんねえんだよなあ」

「それはあんたの理解力の問題だよっ！」

「あ、はい」

ダメダメ、冷静に冷静に。

「カズオ、教科書見せて」

「あいよ！」

寿司屋かよっ！

これは・・・ 教科書にやってはいけないことをすべてやっている・・・

単語と熟語の下に意味書いてるし、文章の下にテキト～な訳書いてるし、

しかも1ページで2～3行にだけ。

しかも・・・

「汚ったない字」

「字も関係あんのか？」

「ないけど」

「なんだよなあ、アカリ～、からかうなよお」

「笑ってる場合じゃない！ 事態は深刻なの！ かなり！ とっても！ 異常に！」

「あ、はい、すいません」

これは・・・ 危篤状態だ。

1週間で健康にしろって言われてるようなものだよ。

カズオはノートの作り方が全然わかってない。

どこが重要でどこにポイントを置くか、これじゃわからないよ。

ノートの作り方から教える？ ダメ、時間なさすぎ。

どうするどうするどうする・・・

あ！ 私がノートを作る！

追試の範囲のところだけノートを作って、丸暗記させるしかない！

「カズオ、この教科書、今も授業で使ってるんだよね？」

「いちおうな」

「いちおうっ？」

「あ、つ、使う、使ってます」

「そっか・・・ そしたら、あんたが仕事に行ってる間、私に貸しておいてよ。

その間に私が追試範囲のノート作っておくから」

「マジで？」

「あんたが帰ってきたら、授業に行く前に教科書返すから」

「お、おう」

「あんたがすることは、私のノートの丸暗記！ それだけはちゃんとやって！」

「アカリ」

「なに？」

「ありがとうございます！」

土下座で・・・！

「あんたね！ 土下座するヒマあったら単語の1個でも覚えてよ！ てか、まだ早いよ！」

「わ、わかった！」

頼むよ？ 丸暗記くらいしてよ？ マジ頼むよおお。

朝起きて部屋から出ようとしたら、廊下側のドアノブに、コンビニの袋に入った教科書と、

『よろしくお願いします』って書いてあるメモが入ってた。

カズオの人生がかかっている。

落第なんてさせられない！ して欲しくない！

その日から、学校の中休みも昼休みも、カズオのノート作りに必死！

家に帰ってからもずっと机に向かった。

『今日はここを暗記すること！ 単語と熟語は10回ずつ書いて覚える！』  
メモと、教科書とノートを、コンビニの袋はなあ・・・ってことで、  
昔使ってた手提げ袋に入れて、離れのドアノブにかけておいた。

次の日の朝、ドアノブにかかっていた手提げ袋の中のノートに、  
すべての単語と熟語が10回ずつ書いてあって、

『マジ全部暗記したよ！ アカリのノート、わかりやすい！』  
あたりまえだよ、英語は得意なんだから。  
でも、よかった・・・って、まだ安心して居る場合じゃないよ。

それから、まるで交換日記みたいにノートとメモのやり取り。  
朝起きて、ドアノブのところに手提げ袋が下がっていると、なんだか嬉しくなる。  
いやいやいや、そうじゃない、時間はない！

『先生からの差し入れだよ！』って缶コーヒー入れてあげたりして、  
『今日、現場で社長が「ウンコみたいな石だな」って俺にくれた』って、なにこれっ？  
お父さん！ ちゃんと仕事しろよ！ てか、カズオもこんなの私に寄せすなよ！  
勉強の方は順調だからいいけどさ。

いよいよ明日が追試の日。

最後の総仕上げで、私の部屋で大特訓！  
赤点取った試験問題をワープロで打ち直して、全部正解するまで何度もやり直し。  
鬼と思われてもいい！ あんたが合格するためならね！

よし！ 終わった！

「これで私が教えられることは全部教えたよ。

進学校の中でも（英語だけは）すごく優秀な私が教えたんだから、  
これでダメなら、追試受ける子たち全員落第！」

・・・だと思う。

「アカリ、マジで、ほんとに、ありがとう」

「お礼は合格してから言って」

てか、合格してよね！

「わかった！ 俺、ぜってえ合格すっから！」

「これでダメだったら、正々堂々と落第して、うちの工務店の従業員になるしかないね」

「え？」

カズオが驚いた顔して、ヤバッ、試験前なのに、悪いこと言っちゃった。

「ウソウソ！ 大丈夫！ 絶対大丈夫だから！」

「俺・・・ それでもいいな、それがいいな」

ハ？ いやいやいや、そんなにネガにならないでよ！

「今の冗談だから！ 大丈夫だってば！」

「俺、社長んところで、ちゃんとした従業員として働かせてもらってさ。

そしたら、俺、アカリのそばにずっといられるじゃん！

そしたら、アカリが俺にして欲しいことあったら、いつでもやってやれるじゃん、ずっと」

カズオ・・・ あんた・・・

「落第したヤツなんか傍にいて欲しくない！」

私の傍にいられるとか・・・ 私がして欲しいこと・・・ そんなことばかり・・・

「私の傍にいたいなら、合格してきてよ！」

どうでもいいんだよ、そんなこと、本当は、でも、どうでもよくないんだよ、だって・・・

カズオがんばったじゃん、すごくすごく。

それ、無駄にしないでよ。

私だって、カズオだからここまでやったんだもん。

それ、無駄にしないでよ。

「明日の試験が終わるまで、私の部屋に来ないで！」

私はカズオのことギュウギュウ押して部屋から出してドア閉めた。

「アカリ」

私だってそばにいたいよ・・・ だけど・・・

「アカリ」

「早く部屋に戻って勉強しなさいよ！」

「教科書とノート・・・ アカリの部屋に」

あ、そうか。

ドアを少しだけ開けて、教科書とノートだけドアの外に・・・

「アカリ」

私の腕・・・ つかまないでよ・・・ 早く行ってよ・・・

「俺、がんばっから！ 絶対合格すっから！」

カズオ・・・

ドアの隙間から見えるカズオの顔は、ニコニコしてて・・・

「アカリ、ありがとな」

私の腕をそっと放して、裏口の方に歩いていった。

私はカズオの背中に両手でこぶし作ってガンバレってにぎりしめて、あっ

振り向いちゃった！から、バタンてドア閉めた。

## 11. 追試の結果

---

追試が終って帰ってきたカズオは、「こんなにわかった試験は初めてだった」って言った。「多分大丈夫」って言ったけど、どこまでわかったのか、多分て、どういう多分なのか、安心材料ひとつもなく、不安なままの三日間だったよ。

今夜わかる・・・ 今夜結果が出る・・・

「あんたが食べても食べなくても結果はもう出てるんだから！」ってお母さんは言うけど、神経ビリビリで、ご飯一粒食べても吐くと思う。

自分の試験のときの方がよっぽど気が楽だよおお。

「お母さんだってね、あんたの受験のときはそりゃ心配したんだから」って言うけどさ、カズオのレベルはハンパないんだから！ 私るときとは違う意味でさあ。

あ・・・ 机の前で眠っちゃってた・・・

朝から気が張ってたから疲れちゃったよ・・・

「アカリ」

「ギャーーーー！」

ビクリしてイスから落ちちゃったよ、イデデ

「あ、わ、悪りい、ごめん」

カズオがあわてて私のこと起こすけど

「な、な、なんで、いるのよ？」

カズオは私の顔の前に紙を・・・

「ち、近い！ 見えないよ！」

「ここ」

カズオが指さして・・・

93

赤い字で・・・ 93

「キュ、93？ 93点？ 93点ーーーーっ！」

カズオがニーーッコニコしながらコクンて・・・

「本当に？ 93点？ すごい、すごーい！」

カズオが私に答案用紙差し出して、私はひとつひとつチェックした。

間違いは、いわゆるケアレスミスだけ。

できてる、できてる、できてるーーーー！

「カズオーーーー！ できてるーーーー！」

涙出てきちゃって・・・

「でき・・・て・・・る・・・」

ああもう泣いちゃったよおお。

「アカリ、ありがとな」

カズオは私の頭をなでて・・・

「アカリのおかげだよ」

「カズ・・・オ・・・も・・・がんばった・・・も～ん・・・」

「ありがとな」

カズオが私のこと抱きしめるから・・・ホッとしちゃって・・・もっと泣いちゃって・・・

「よかつ・・・た・・・」

よかった・・・ホントによかったああ・・・

「先生がさ・・・」

カズオは、私を抱きしめたまま・・・

「追試で93点取ったやつは初めてだって」

私はカズオの腕の中で・・・

「そりゃ・・・そうだよ、ヒック、93点とれるなら、ヒック、追試受けないもん」

「だよな」

カズオの笑い声が頭の上で聞こえる・・・

「よかったね」

本当によかったあああ

「アカリ」

カズオがギュウウッて私のこと抱きしめたから・・・

「カ、カズオ、く、苦しいよ・・・」

「あ、ご、ごめん」

カズオが腕の力ゆるめて、私の顔を見た。

その目は・・・その目が・・・あれ？　なんかいつもと・・・

「カズオ、何かあった？」

「え？　べつになんも、あ・・・あるある、あるじゃん！　これ！」

そう言って93点の答案用紙をかざして見せた。

「落第しないね」

「うん、アカリのおかげだよ」

「もちろんそうだよ」

って言ったら、カズオが笑って

「アカリ！　サイコー！」

って、またガバッと抱きついてきた。

カズオの腕の中・・・いつものカズオの・・・なんか・・・ちがう・・・

「カズオ・・・」

私は、両腕でグイッとカズオの身体を離して、カズオの顔を見た。

「何かあったの？」

「え、だ、だから、93点・・・」

「あんた、ウソがクツソヘタ！」

「え？」

「わかるもん、何かあったんでしょ？」

カズオは私を見て、ちょっと困った目で、ちょっと困ったように笑って、天井見上げて・・・

「なによ？ 言ってよ！」

カズオは天井を見たまま、何か迷ってるみたいなの、どう言えばいいのかみたいな、何か言おうとして口を動かそうとして、くちびる噛んで・・・

「私に言えないこと？」

相変わらず天井の方を見ながら・・・

「言えないっつうか・・・」

困ったなあみみたいに頭ボリボリかいて・・・

「なによ？」

「なんつったらいいのか・・・」

もーっ、ハッキリしないなあっ！

「わかった！ もういい！」

私は空のマグカップ持って立ち上がった。

「アカリ！」

その手をつかまれて、マグカップが床に落ちた。

「な、なに？」

カズオが私の手をつかんだまま立ち上がった。

「あのさ・・・」

って言って、フーッて大きく息を吐いて・・・

「明日・・・」

明日？

「デート・・・ してくんねえかな」

「ハ？」

「俺とデートしてください！」

そう言って90度のお辞儀したけど？

「言いたかったのって・・・ それ？」

一瞬...間があった。

「うん」

「私に、デートしてくれって言うまで、あんなに時間かかったってこと？」

「うん」

「なんで？」

「そりゃ、やっぱ怖えじゃん、断られっかもしんねえからさ」

「断る！」

「ええええええ」

カズオが大げさに床に崩れ落ちた。

「なんで私がカレシでもないあんたとデートしなきゃいけないのよ？」

「そんじゃ、カレシにしてくれよ」

「ハ？」

「そしたらデートしてくれんだろ？」

「あのね、カレシって、カレシにしてくれよって言われて、カレシにするものじゃないでしょ！」

「そんじゃ、どうやったらカレシにしてくれる？」

「それは・・・ だから・・・ ああもうっ、わかったよ！ するよ！ デートすればいいんでしょ！」

「マジ？」

「英語の追試93点取ったご褒美ってことだからね」

「ヤッタ！」

生まれて初めてのデートの相手がカズオかぁ。

イヤ・・・ じゃないのは、なぜ？

いいけど。

## 12.デート

---

私の隣りを歩いてるカズオ、白のTシャツに、ヤツが持ってる中でいちばんマシであろうジーパン、  
ヤツ的にはいちばん新しいであろうスニーカーで、  
いつもは髪の毛タオルでグシャグシャッて乾かしたままみたいな髪は、  
なんかブラシでちゃんと梳かしてて、髭剃り過ぎて、アゴのところに小さな傷作っちゃって・・・

カズオ的にかんばった！感満載で、可笑しくて、今、笑いこらえてる私。

「どした？」

私の視線感じてこっち見たカズオ。

「カズオが・・・（ダメダメ、必死にかんばったんだから）」

「俺？ 俺がなに？」

「かっこいいなって思って」

ウワッ！ 真————っ赤！ 耳まで真っ赤になっちゃったよ！ 笑っちゃダメダメダメ！

「ア、アカリは、か、可愛いじゃん」

あ———も———耐えられない！

「アハハハハ」

「な、なんで笑うんだよ？」

「ン・・・（言えない） ちょっと照れくさかっただけ（ウソだけど）」

「マ、マジ、可愛いよ」

カズオはチラッと横目で私を見て、照れくさそうに視線外した。

私は、白地に薄いブルーのドットのサマードレスに白のサンダル。

ジーパンでいいかなあと思ったんだけど、いちおうデートだからね。

デートっていってもねえ、私もちゃんとしたデートなんてしたことないし、

「アカリが行きたいところに行こう」って言われたけど、

遊園地っていってもねえ、絶叫系苦手だし、水族館で、魚なんか興味ないし。

だから今、ショップが並んでる街を歩いているだけなんだけど、この通りってカップル多いよなあ

「カズオはデートしたことある？（あるわけないよね）」

「あるよ」

「ウソ！ あるの？」

カズオとデートした子ってどんな子？ てか、どんなデートしたの？ 笑えるうう。

「アカリとしたじゃん」

「へ？」

妄想の世界で・・・とか言わないでよ、キモイから。

「俺がこっちに来た最初の日曜日にさ、公園で会ってデートしたじゃん」  
ハ？ カズオが最初にこっちに来た日曜日に公園？ あ！  
「あれはデートじゃないでしょ！ たまたまバッタリ会って、一緒に家に帰っただけじゃん」  
「俺は楽しかったよ」  
そういえば・・・ あのときも、楽しかったとか、また遊ぼうとか言ってたな・・・  
デートだと思ってたから？ バッカじゃない？  
「あれがデートだっていうなら、近所のおじさんと偶然一緒に歩いてもデートになっちゃうよ」  
「俺、近所のおじさんかよ」  
カズオが情けない顔して笑ったけど、そういうことじゃん。  
「デートっていうのは、ほら、あの人たちみたいに」  
前を歩いてるカップルをチョンチョンと指差して見せて  
「腕組んだり手をつないだりして歩いて、それから」  
ガバッと、突然、カズオが私の手をにぎった・・・！  
「こ、これなら、デートだよな」  
思わずカズオの顔見ちゃった。  
カズオは照れたみたいに前の方向いたままで私のこと見てないよ。  
「カズオ」  
「な、なんだよ？」  
「かっこいい」  
出た！ 瞬間芸！ 顔、真——っ赤！  
私の手をにぎってるカズオの手が汗ばんでるし。  
カズオの手って・・・  
大きいんだね。  
指も長くて、あちこち傷痕だらけなのは現場でケガしたんだね、男の人の手ってカンジで、  
そういえば私、男の人に手をにぎられたの初めてだよ、やだ、なんかドキドキしてきちゃった。  
なにドキドキしてんのよ、カズオだよ？ カズオ・・・なんだけど・・・

私のお気に入りのケーキ屋に連れてきた。  
わああああ♪ どれも美味しそう♪ 可愛いしいい♪  
フランボワーズのムースも美味しそうだし、夏限定ミルフィーユも食べてみた〜い♪  
「カズオは、どれがいい？」  
「え、あ、ん、えっと・・・ これ」  
シュークリーム？ こんなにいろいろあるのにシュークリーム？ フッツーのシュークリーム？  
そんなにシュークリームが好きなの？ これだけ山ほどある美味しそうなのケーキより？  
「ど、どした？」  
「なんでもない」

呆れてるだけ。

紅茶がふたつ運ばれてきて、私の前にはピーチシャンパンムース。

カズオの前にはシュークリーム。

もっとオシャレなのを選んでくれたら、私も味見できたのに、シュークリームって。

「どした？」

「べつに」

「なんか怒ってねえ？」

「べ・つ・にっ」

「ぜってえ怒ってっだろ」

「怒ってないよ！」

「ほら、やっぱ怒ってんじゃんよ」

「あんたがしつこいからでしょ！」

「食う？」

カズオがご機嫌とるみたいに私にシュークリームが乗ったお皿を差し出した。

「いらないっ！」

カズオは私の顔をチラチラ見ながら、手づかみでっ、シュークリームをパクッと・・・

「あっ！ ウンメッ！」

あ、そ。

「コンビニのと、ぜ～んぜん違うな、やっぱ高級なのってすげえな」

シュークリームでそこまで感動されたら、シュークリーム作った人は嬉しいでしょうよ！

私はピーチシャンパンムースに浸ろう。

フォークでスッと下まで切って・・・ 中にもフレッシュな桃が入ってるう♪

「はあああ♪ 美味しいい♪」

しあわせ～♪

「一口」

「ハ？」

「俺にも、ちょっと食わせてよ」

「ハァァァァァ？」

あんたはシュークリーム食べてればいいでしょ！

「チビッとでいいから」

なにそのおねだり顔！

んもーっ、あいつの使っていないフォーク取って、それに一口分切って

「ほら！」

「サンキュ！」

って、私にフォーク持たせてパクッ？

「うおおおお！ すげえ！ なんだこれ！ うめー———！」

反応が激しすぎて怖いよ。

「俺のも食ってみろよ」

「いらない」

「遠慮すんなって」

遠慮じゃないからっ。

「うめえぞ、ほら！」

手づかみで、しかもかじった方こっち向けるっ？

「食べてない側！」

「あ、ちょっと待ってろよ」

あ〜あ〜あ、カズオの手垢まみれだよおお。

「ほい」

チロッとカズオの顔見ると、ニーッコニコしちゃってさ。

少しだけ……

「あ……」

さすが！ カスタードと生クリームが絶妙！皮もバターくさくなくてサクッと軽いし。

「な？ うめえだろ？」

あんたが作ったみたいに言うな！

「アカリ、ついてんぞ」

「何が？」

「口んところにクリーム」

「えっ？ どこ？ ここ？ どっち？」

カズオが身を乗り出して私に近づいて、指を私のくちびるの横に……

「とれた」

あっ、ちょっ、その指そのまま舐めないでよ——っ！

「ねえ」

「ン？」

「なんでそんなにシュークリームが好きなの？」

「うめえじゃん」

「それはそうだけど、こんなに種類があるのに、あえてのシュークリーム！ってくらい好きってさ」

「それは…… 他に知ってんのがなかったから」

「ハ？」

「どれ見ても何がなんだかわかんなくてよ」

「それで…… シュークリーム……」

「これだはわかった！」

「あ……そ」

そうだった…… こいつも男だった…… お父さんもケーキって言えばショートケーキだ

もん。

「今度ここに来るときは、あんたに選ばせない！」

「ど、どした？」

「あんたの分も私が選ぶ！」

「次は・・・プリンくらいなら」

「プリンならプッチンプリン食べてなさいよ！」

「あ、はい」

「次はあんたの分も私が選ぶ！ 決まり！」

カズオが黙って私のこと見てる。

「なに？ なんか文句ある？」

「次は・・・アカリが選んでくれよ」

そう言ってニコツとした・・・けど、なんか・・・なんだろう？

「なんか・・・カズオ・・・ヘンだよ」

「顔か？」

そう言って笑うけど・・・

「なあ、もう一口」

私のムースを指さして、両手合わせてお願いポーズってさ！

「もう！ 私が食べる分なくなっちゃうよ」

あげたけどね。

「うおおおおお！」って、また雄叫びあげたけどね。

### 13.にぎった手

---

ウィンドウから見える通りを見ながら、カズオがボソッと書いた。

「なんか夢みてえだな」

「なにが？」

「なんつうか・・・ 全部」

「全部って、漠然としすぎてわかんないよ」

「なんつったらいいんかなあ？ まあ・・・ 全部」

「なにそれえ！ もっと具体的に入ってよ」

「ン・・・ こうやって、アカリとケーキ食って紅茶飲んでたり」

まあそうだね、最初の頃は絶対ありえなかったよ。

「あとは、あ！ 追試で93点とったりよ」

「それは夢じゃなくて、カズオと私の努力の結果だよ」

「だから、そういう、アカリに勉強教えてもらってとかさ、俺、初めてあんなに勉強したもんなあ」

「次からはちゃんと自分でやってよね！」

「次か・・・」

「そうだよ、二学期も三学期もあるんだから」

カズオが私の顔を見て・・・ ニコツとしたけど・・・ やっぱりなんか・・・

「俺さ、小学5年んときにかあちゃん死んでさ」

「え？」

まだ小学生のとき？

「親父は俺が小さいときにかあちゃんと離婚したから、どこにいるかもわかんなかったし」

カズオ・・・ そんな子ども時代だったの・・・

「そんで、じっちゃんが俺のこと引き取ってくれてよ。

じっちゃん、無口でぶっきらぼうだったけど、優しいじっちゃんだったよ」

その人が・・・ お父さんがお世話になったっていう人だよね・・・

「じっちゃん死んだとき、俺、高校やめて働くつもりだったんだ。

勉強キライだったし、頭ワリィから、学校なんてどうでもいいつうか好きじゃなかったしよ

。

親戚もなんもいねえから一人で食ってくしかなかったし」

カズオは・・・ すごい現実と向き合ってたんだね・・・ 私なら・・・ ムリ、想像もできない・・・

「社長が通夜に来てくれて・・・ じっちゃんが昔働いてた工務店の社長だって言われて・・・

わざわざ電車乗って来てくれたんだってビックリしたんだけどよ。

社長が、自分とこに来て高校続けろって言ったときはもっとビックリしてよ」

そりゃビックリするよね。

「なんで見ず知らずの俺によ、親戚でもなんでもねえのに、ここまでしてくれんのかなあって」  
お父さんが今こうしているのは、カズオのおじいさんのおかげ・・・だからだよ。

「最初は断ったんだよ、高校行く気なかったし、知らない人にそこまでしてもらって、なあ」  
お父さん、ちゃんと説明したのかなあ？

「でもよ、社長が、自分にも高校生の子どもがいるから、一緒に暮らせばいいよって、  
それ言われたとき、俺、グラッとしたんだよな、俺一人っ子だからさ、  
兄弟がいるってどんなかなあとか考えちまってさ、なんつうの？ ちょっとあこがれたっつ  
うか」

一人っ子あるあるだよ。

「俺よかひとつ年下だっつってたから、そんじゃ弟みたいなんかなって」

「弟～っ？　なんで勝手に私のこと弟だと思い込んだのよ!？」

「あ、いや、だからよ、社長は『俺の子ども』つただけで、男とか女とか言ってなくてよ。

一緒に暮らすってことは、男なんだろうなって」

お父さ——んっ！　説明不足にも程がある——っ！

だから家に来たのか！　私のこと男だと思ったから・・・　少し謎が解けたよ。

「そんで、社長ん家に着いたとき、奥さんが、うちの娘がって言ってよ。

最初聞き間違えたのかなあって思ったんだけど、何回も言うから、マジだって、ビックリし  
てよ」

するよそりゃ！　私だってビックリしたもん！

「そんで、アカリが入ってきたじゃん」

入ってくるよ、私の家だもん！

「俺、チョー——ビックリしてよ」

「なんでよ？」

「俺さ、社長の娘っつうから、社長の顔の女の子バージョン想像しててよ」

あんな顔だったら、私、生きていたくないよ！

「そしたら、すっげえキレイでビックリした」

「あのね、比較したのがお父さんの顔なら、世の中の女の子みんな絶世の美女だよ」

「じゃなくてさ、マジマジ！　なんつったらいいんだ？　あ！　俺のチョー・ドストライク！」

「あ・・・そ」

まあ・・・　悪い気はしないけどさ。

「やっぱ都会の女の子はちがうなあっつうかさ」

都会っていても都心から離れてるけどね。

「俺なんかぜってえ相手にしてもらえねえだろうなって思ったけどよ」

相手にするつもりなかったよ、なかったけど、なんでだろう、今は・・・

「俺さ・・・」

カズオの顔が見たことないくらい真剣になって・・・

何か言おうとしてるのに言えないって顔になって・・・

「なに？」

笑おうとしてるんだろうけど、口元が引きつって・・・

「なによ？」

「えっと・・・」

ハアアアって大きく息吐いて・・・

「やだ、なに？ 言ってよ」

「んっとさ・・・だから・・・あのさ・・・」

「さっさと行ってよ！ 気になるじゃん！」

カズオが私の顔ジーッと見て・・・ なに？ なになになに――？

「行ってってば！」

カズオがちょっとくちびる噛んで・・・ あ、目を閉じた！ あ、開けた！

「俺・・・ アカリが好きだ」

「ハ？」

「マジで・・・ 好きだ」

これって・・・ いわゆる・・・ 告白？ だよな？

私は・・・ どうすればいいの？ カズオのこと・・・ 好きとかそういうの・・・ 考えたことなかった。

いちおう私も何か言った方がいいのかな？ 言わなきゃだよな・・・

「そんだけ！」

「え？」

そんだけって、完結？ 私の答えは？ いらんってこと？

いらんなら・・・ いいけど。

帰り道。

手をつなぎながら歩いている。

ケーキ屋では、あんなにしゃべってたカズオが、今はずっと黙ったまま。

だけど、ときどき、にぎってる私の手をギュウツて強くにぎるんだよ。

そのギュウツてときに、何か考えてるような気がして・・・

ギュウツてにぎられてるのに、カズオが遠く感じて、なんだか不安になるのはなぜだろう。

「カズオ」

思わず呼んじゃった。

「ン？」

って、私のこと見るカズオの目は、あのいつものあったかい目で・・・

そうか・・・ そうなんだ、私にとってカズオって・・・

「どした？」

私のこと覗き込むカズオの目を見ると・・・ ホッとする。

「あのね・・・ 私にとってカズオは・・・ ていうか、カズオといるとホッとする」  
カズオがちょっと照れたように下向いた。

「なんか、ずっと前からカズオといたみたいなの、いないのが考えられないっていうか」  
カズオが「え？」って顔で私を見たけど、本当なんだもん。

「だから、いてよね」

なんかちょっと恥ずかしくなって、ツンてカンジで

「いてくれなきゃ困るもん、夜中にコンビニ行くときとかさ」

「俺ってパシリ？」

カズオが笑った。

「なんでもしてやるって言ったの、あんたじゃん！」

「うん、言った」

「でしょ？」

「マジで・・・ 今も、マジで、そう思ってっから」

カズオは、またギュウツて私の手をにぎった。

ここを曲がれば家ってときに、カズオが立ち止った。

「どうしたの？」

「アカリ、俺・・・ 今日すげえ楽しかった」

「私も楽しかったよ」

いろいろおもしろかったしね。

「最高にしあわせっつうか」

「だったら、またしてもいいよ、デート」

カズオがちょっと驚いたみたいなの、何か言いたそうな顔で・・・

「イヤなの？」

「あ、そ、そうじゃなくて、あの、またって言ってくれると思わなくて・・・」

そっか、カズオはこれが最初で最後のデートだと思ってたからヘンだったんだ。

「約束したじゃん、次は、私がカズオの分のケーキ選ぶって」

「だよな」

カズオが優しい顔で・・・

あっ ガバツて抱きしめられちゃった・・・！

ドキドキドキドキドキ なに、なんでこんなドキドキするの？ 好きって言われたから？

「アカリ・・・」

「は、はい」

はいて、私も・・・さ・・・

「俺・・・マジでアカリが好きなんだ」

「うん・・・」

だ、だろうね、こんなにギュウッて抱きしめられれば信じるよ・・・

「マジで・・・ずっとアカリのそばにいてえって・・・」

「いてよ」

「いてえよ・・・いてえよ・・・」

「だから、いてってば、そばにずっといてよ」

カズオが腕の力をゆるめて、私の顔を見た。

「ありがとな」

あったかい目で・・・でも・・・

「何に対してのありがとう？」

「ン・・・全部」

「だからあ、全部って漠然としすぎだよ」

「全部は・・・全部だよ」

「語彙が少なすぎだよ！」

「ご、ごい？」

「もういい！ わかった、全部ね」

「うん、全部」

カズオはそう言って、あったかい顔して、また私の手をギュウッてにぎった。

## 14. カズオのお父さん

---

玄関のドア開けて、できるだけフツツのカンジで

「ただいま」

お母さんが出てきた。

「あら？ カズオくんは？」

「今日は晩ご飯いらないって」

「あら、どうしたのかしら？」

「知らない」

本当は・・・

「アカリとデートして、なんか胸いっぱいっつかさ、メシ入んねえよ」って言ったんだけど。

「ケンカでもしたの？」

「してないよ！」

なにそれ？ 子どもじゃないんだから、ていうか、ケンカどころか・・・

「なにニヤニヤしてるのよ？」

「し、してないよ！」

「楽しかった？」

「まあね」

デートの話をお母さんにしたくないよ。

「お！ 帰ってきたか」

お父さんが居間からノソノソやってきた。

赤い顔していつものビールか。

「どうだった？ 楽しかったか？」

もうっ、カズオが悪いんだからね！

お父さんとお母さんに私と出かけますって言っちゃうなんてさ。

デートって、親に言わなくてもいいのにさ、てか、知られたくないよ。

「カズオくんは楽しんでたか？」

シュークリームに感激してたよ！

「いい思い出になったかしら？」

「そうだな」

最初で最後のデートってわけじゃないよ。またしようねって約束したし。

次は絶対内緒にしよう。

「淋しくなるわねえ」

「なにが？」

「何がって言い方はないでしょ、デートまでしたのに」

???なんだけど？

「現場の仕事もこれからってときだったんだけどなあ」

「なんの話？ 意味わかんないんだけど」

お父さんとお母さんが顔見合わせてるけど、なに？ なんなの？

「カズオくんから聞いてないの？」

「なにを？」

「あらやだ！ カズオくん、アカリには自分で話すって言ってたから」

「だから何を？」

お母さんがお父さんにSOSみたいな目を向けて・・・ なに？ なんなの？ わけわかんないよ。

「カズオくん、実のお父さんのところに行くことになったんだ」

ハ？ だって、カズオのお父さんは小さい頃・・・ どこにいるかもわからないって・・・

音信不通だったカズオのお父さんは、カズオのおじいさんが亡くなったことを、どこからか聞きつけて、おじいさんのカズオが住んでた家に行った。そこで近所の人から、ここにいるって聞いて連絡してきた。

「突然お父さんの事務所に電話してきたんですって」

「い・・・ いつ？」

「昨日よ、そうよね、お父さん」

お父さんは黙ってうなづいた。

「カズオは？ カズオは知ってるの？」

「カズオくんも電話で話してたからな」

なにそれ・・・

知ってたって・・・ 電話で話したって・・・

（私の）お父さんは、ここまで連れてきたのは自分だから、卒業まではお世話させてくださいって。

仕事もしっかりやっているし、家族とも仲良くやっているから安心してくださいって。

でも、カズオのお父さんは、自分の息子が他人に世話になるのは筋が違う、実の父親の自分が引き取ると言い張った。

「実の親にそこまで言われたら、こっちとしてはどうすることもできないからな」

おとなの世界はわからない。

身内がないからって引き取って、学校に行かせてる他人より、

突然現れた顔も知らないような親の方が力があるんだ・・・

いいけど、どうでも。

「カズオは？ カズオはどうしたいって言ったの？」

「納得するしかないだろ、実の父親が現れたからは、ここにいる理由はないからな」

理由・・・

そうだよな・・・ 理由があったからここにただけで・・・

ここにいたかったからいたわけじゃなくて・・・

本当のお父さんが現れたら、一緒に住みたいって思うよね・・・

「今週の水曜日に迎えにくるそうさ」

水曜日？ しあさって？ そんなに急に・・・

昨日・・・ 追試の結果見せに来たときにはもう・・・ 知ってたってことだよな・・・

今日だって・・・ 知ってたくせに・・・ 何も言ってくれなかった・・・

言おうとしたの？ そういえばヘンだった、でも・・・ 言わなかった・・・

「次はアカリが選んでくれよ」とか、まるで次があるみたいなこと言って・・・

私のこと好きって言って・・・

でも、あのときにはもう二度と会えなくなるって知ってた。

思い出・・・ さっきお母さんが言ってた。

思い出作り？ 私とのデートは楽しい思い出作り？

だから言わなかったの？ 楽しい思い出作りたかっただけだから？

いいけど。

サイテー。

## 15.だからなに？

---

月曜日の朝。

キッチンに行くと、いつもどおりお父さんはもう仕事に出かけたあと。

「カズオくんも仕事に行ったのよ」

どうでもいいよ、そんなこと。

「お父さんは、あと少しだからゆっくりすればいいって言ったんだけどね。

現場は楽しいから行きたいって・・・ 気を使ってるのかしらねえ。

世話になったから最後まで働こうと思ってるのかもしれないわねえ」

今日の一時間目は現国か。

二時間目は・・・ なんだったっけ？

「あんたも淋しくなるわね」

あ、数学だ、ユウジくんにノート借りよう。

「アカリ！」

「なに？」

「カズオくんがいなくなるから淋しいんでしょ？」

「べつに」

「強がっちゃって」

「強がってなんかないよ、前の生活に戻れるだけでしょ」

「そうだけど・・・ あんなに仲良くしてたじゃない」

「仲良くしてたわけじゃないよ、勉強教えてくれって言われて教えてやっただけだし、一緒に出かけってくれって言うから出かけただけで、それだけだよ」

「そういうふうには見えなかったわよ？」

「どう見えようと勝手だけど、私はアイツがいなくなると思うとホッとする。

他人が家にいるのって落ち着かなかったもん」

「でも、アカリ、カズオくんといるとよく笑うようになって、だからお母さん、アカリが」

「だから！ 気を使ってたって言ったでしょ！ 疲れたよ！ いなくなったらサッパリするよ！

もう二度と他人を家にいれないでよね！」

「アカリ・・・」

「お父さんの勝手な思いつきに振り回されるのはもうたくさんなの！」

「お父さんは、そういうつもりじゃ・・・」

「もういいじゃん！ いなくなるんだから！」

お弁当の包みをつかんで・・・

「行ってきます！」

ダイニングのドアをバンッて閉めて玄関に走った。

中休みに、ユウジくんの数学のノート借りて、わからないところを教えてもらった。

「ねえ、ユウジくん」

「なに？」

「語彙が少ないの語彙って意味わかる？」

ユウジくんが笑った。

「わからないヤツなんていないだろ」

「それがいるんだよねえ」

「ウソだろ？」

「だから話が全然通じないの」

「それは通じないだろうな、語彙もわからなきゃさ、外国人？」

「みたいなもんかな？」

「みたいなもんで何だよ？」

笑ってるけどさ・・・

「もうウンザリ」

「そうかもな、あ、山岸、4 門目抜かしてる」

「あ、ヤバ、ありがと」

私の世界が戻ってきたよ。

私の場所はここ、進学校のクラスの中。

いろいろあり過ぎて混乱してただけ。

晩ご飯食べて、シャワーも終わって、お気に入りの曲をかけて、勉強してまーす。

くだらない追試につき合って遅れてた分を取り戻さないと。

あと1年あるから、もう少し頑張れば志望校ワンランク上にできるって先生が言ってくれたしね。

「アカリ、入るぞ」

ハ？

「お父さん、入るぞって勝手に入ってこないでよ！」

「勉強してるのか？」

「そうだよ、ジャマしないでよ」

「少しお父さんの話聞いてくれないか」

「だからあ、今勉強してるから今度にして」

「ちょっとだけだから、聞きなさい」

「あ、ちょっと！ 靴下履いたままで私のベッドであぐらかかないでよ！」

「わかったわかった、脱ぐから」

「やだ！ 脱いだ靴下ベッドの上に置かないでよ！」

「どうればいいんだよ？」

「ズボンのポケットに入れればいいでしょ！ てか、何よ？ 早くしてよ！」

「おまえの性格は、若い頃のお父さんにそっくりだな」

「ハァ〜ッ？ そんなこと言いに来たの？ てか、そっくりとか、すごいイヤなんだけど！」

「親子なんだから似てるのはあたりまえだろ」

「そんなこと言いに来たんなら、出てってよ！ 勉強してるんだってば！」

「片肘張って、自分でなんとかしようとしてたよ、お父さんも若い頃はな」

「酔っ払ってんの？ ねえ、早く出てってよ」

「そんなお父さんを助けてくれたのが、ヤスさんなんだ」

「ヤスさん？ 誰それ？」

「カズオくんのおじいさんだよ」

ゲンナリ

「お父さんがこの工務店を継いだのは26のときなんだ」

「だからさあ、思い出話はまた今度にしてよお、勉強してるんだって言うてるでしょ」

「いいから聞きなさい！」

なに・・・よ、急に威張っちゃって・・・

「おまえのおじいさんが急に亡くなったんだ、それで継ぐことになってな。

それまでは大学卒業して、全然違う職種の会社に勤めてたから、継いだものの、何をどうすればいいのかわからなくてなあ」

なんでこんな昔話聞いてなきゃいけないのよお。

「経理の勉強したり、今でいう経営セミナーみたいなものに通ったり、いろいろやったんだけどな。

得意先は少しずつ減っていくし、腕のいい職人もどんどん辞めていって、

もうこれは閉めるしかないなってところまで行ってたんだ。

この工務店はおまえのひいおじいさんから続いてたんだが、もう無理だなって」

そんな話聞くの初めてだけど、聞いてどうしろっていの？

「そんなときだったな、ある日、ヤスさんが、カズオのおじいさんがな、

坊ちゃん、現場で働いてみてくれませんかかって言ったんだ」

「坊ちゃん？」

「ヤスさんは親父の代から働いてくれてたから、ヤスさんにとっては俺は坊ちゃんなんだよ」

お父さんが坊ちゃんて・・・ 似合わなすぎる・・・

「ヤスさんはふだんは無口で余計なことは言わないし控えめに黙々と仕事する人だったんだ。

そのヤスさんが、そんなことを言うから驚いたけど、正直もう藁にもすがる思いで現場に行った。

ヤスさんに現場での仕事をひとつひとつ教わりながら、現場のみんなといううちに、

現場で必要なこと、工務店とは何かってことが身を持ってわかるようになってな。  
数字や机の上の設計図や書類だけ見ていたらわからなかったことが見えてきたんだ。  
それから、お父さんは今までの自分の思い込みを捨てて、  
現場での経験から物事を考えるようになった。

そうすると、不思議なもので、お客様が少しずつ増えてきて、腕のいい職人も入ってきて、  
それで、なんとかこうやって今でもやっていけるようになったんだ」

だから、すごく世話になった人ってことか・・・  
えっ？ ま、まさか・・・

「お父さん、私イヤだからね！」

「何がだ？」

「工務店継ぐのイヤだよ、てか継がないからね！」

「おまえに継がせようとは思ってないから安心しろ」

よかったあ。

「まあな、婿でもとってくれたらって思わないこともないけどなあ」

「婿なんて絶対イヤ！ とにかく継がない！」

「わかったから、継がなくたっていいから。そこは心配するな」

絶対イヤだよ、工務店なんて。

「ヤスさんが亡くなったって聞いて、通夜に行ったら、カズオくんが一人で喪主しててな」  
だからもうその話はいいよ。

「話してみると、優しい子で、ヤスさんに性格が似てるなあと思ったんだ。

なんかなあ、お父さん、ヤスさんに頼まれた気がしたんだよ。

今度は坊ちゃんがこの子を育ててやってくださいってさ」

ただの思い込みだよ。

「カズオくんは、現場では一生懸命で、ひとつひとつ覚えようと頑張ってたな。

棟梁も可愛がって、他の職人たちにも可愛がられて、どんどん仕事を覚えていったよ。

教えたいことはまだまだいっぱいあったんだけどなあ」

「しょうがないじゃん！ 本当のお父さんのところに行くんだから！」

「まあそうなんだけどなあ」

「本人が選んだんだから！ 本当のお父さんと暮らしたいんだから！」

「アカリ、カズオくんは行きたくて行くわけじゃないんだ」

「なに言ってるの？ 行くって決まったんでしょ？ あさってにはいなくなるんでしょ？」

「カズオくんは、電話で何度も断ったんだよ、行きたくないですって、実のお父さんにな」

「お父さんが傍にいたから、遠慮してそう言っただけだよ、だって結局行くんだから」

「訴訟起こすって言われたんだ」

「ハ？ 訴訟って？」

「自分の息子を他人が勝手に連れて行って、無理やり働かせてるって訴えるってな」

「なに・・・それ・・・」

「それで、カズオくんは・・・ 実のお父さんのところに行くって承諾したんだよ」  
だから？

「だからなに？」

「つまり、カズオくんは行きたくて行くわけじゃないんだ」

「でも行くって決めたんでしょ？」

「だからそれは、向こうが、カズオくんのお父さんが」

「訴訟するって言われてビビったんでしょ？」

「そうじゃない！」

「カズオだって、現場で一生懸命とか棟梁に可愛がられてとか、だからなに？」

だからなんだっていうのよ・・・

「あさって、カズオはいなくなる、本当のお父さんのところに行く、それだけでしょ！」

「アカリ、おまえは・・・」

お父さんの顔が真っ赤になって・・・

「少しはカズオくんの気持ちを考えてやれ！」

バチーンって音と同時に私は床に倒れた。

顔あげると、お父さんが狼狽したような目で・・・

「殴って気が済んだら出てってよ。勉強するんだから」

私はずっとお父さんを睨んで・・・

お父さんは何か言おうとして、でも、黙って部屋から出ていった。

サイテー。

## 16.はずれたチェーン

---

現国・英語・英文法・古文・世界史・日本史、怒涛ってこのことくらいやったよ。

全部文系の科目っていうのがナンだけどしかたないよね。

今何時？ もう12時過ぎだよ。

チョコレート食べたい。

すっごく食べたい、無性に食べたい。

食べないと眠れない。

買いに行こう！

裏口を出ると、離れの窓から灯りが見えた。

まだ寝てないんだ・・・ いいけど、どうでもいい。

自転車出して、ペダルを踏んだ途端、ガッシャーーンて横倒しになっちゃって、

「痛った〜い！」

あ！ やだあ、ひじ擦りむいちゃったあ、血が出てるよお。

なんでよお、チェーン外れてるよ、もうっ。

どうすんのよお、はめるけどさあ、苦手なんだよこういうの、もうっ。

「アカリ？」

後ろから・・・ アイツの声がした。

どうでもいい、それどころじゃない、チェーンつけなきゃ、チョコ買うんだから。

「なにやってんだ？」

チェーンつけてるんだよ！ てか、関係ないし、無視。

「俺やるよ」

って、私の横にしゃがんで、私の手からチェーンを・・・ 放っというてよ！

アイツの手からチェーンを奪い返して、えっと、ここから・・・

「俺やるって」

アイツが私の手からチェーンを・・・って、なにコイツ!?

「放っというて！」

「すぐできっから」

聞こえなかったのっ？ 放っというてって言ったじゃん！

アイツが手際よくチェーンをはめていく、アッタマくる！

「よし！ これでオッケー」

アイツの手から自転車奪い返してサドルにまたがって、さっさと行こう、チョコ食べたいんだから。

「アカリ、どこ行くんだ？」

どーでもいいでしょ！

「アカリって！」

アイツが私の自転車のハンドルつかんだ。

「こんな夜中に危ねえだろ、コンビニか？ だったら俺が行くからよ」

無視！ ペダルをグイッと踏んで走・・・れないじゃん！ ハンドル放してよ！

ハンドルをグイグイッと動か・・・そうとしても、アイツがギュツてにぎって動かないっ。

「俺が行くって。何買うんだ？ あれか？ あの、ナプキンか？」

ナッ わ、私が夜中に買いに行くのはナプキンで決めつけないでよっ！

「俺買ってくるからよ、アカリは家で待ってろよ」

うるさい・・・ うるさいうるさいうるさい！

「放っというて！」

「危なねえって！」

「放してよ！ 私の自転車から手を放して！」

「アカリ！」

私は・・・

顔をあげて・・・ アイツを・・・ 黙って睨んで・・・

「アカリ」

アイツの音が・・・ 私の名前を呼ぶ声が・・・

「アカリなんてね・・・」

冷たくて苦いものを・・・

「アカリなんて馴れ馴れしく呼ばないで！」

傷つけてやりたくて・・・

「他人のくせに！ 私の名前呼ばないで！」

あいつの目がほんの少し悲しそうに私のこと見つめてても・・・ そんなことどうでもいい・・・

あいつが私のこと見つめたまま・・・ 押し殺したように大きく息を吐いても・・・ どうでもいい・・・

「お嬢さん」

奥歯をギュツと噛みしめたけど・・・ 見られたくなくて・・・ 顔をそむけた。

「お嬢さん、頼むからよ、危ねえことしねえでくれよ」

アイツの悲しそうな声を聞いても・・・

「俺が行くからよ、お嬢さんは家で」

「うそつき」

私の冷たい声が私の耳に聞こえてくる。

「うそつき」

今度はアイツに向かって凍るような声をぶつけた。

「もうだまされない」

自転車下りて・・・

「あんたのウソなんか聞きたくない」

ハンドルごとアイツの方に自転車を突き飛ばして、通りに向かって走った。

すぐに、あいつの手が私の腕をつかんだ。

「放してよ！」

「アカ・・・ お嬢さん、俺の話聞いてくれよ」

「放して！」

アイツの手を振りほどいた。

「頼むからよ、ちょっとでいいから、俺の話聞いてくれよ」

「聞いたよ」

必死に・・・ 必死に抑えてた・・・

「これ以上聞かなくたってわかってるよ」

くちびる噛んだけど・・・

「あんた、いなくなるんでしょ」

勝手に・・・ イヤなのに・・・

「お父さんもお母さんも何度も何度も何度も！」

涙だけボロボロ落ちてきて・・・

「わかってるよ！ 私ちゃんとわかってるよ！ あんたがいなくなるって！」

怒ってるはずなのに・・・ 涙が止まらなくて・・・

「もう聞きたくないよ！ わかってるから！ あんたがいなくなるなんて、もう聞きたくない！」

私は・・・ バカだ・・・

「どうせいなくなるんだから、おしえてあげるよ、私はね・・・」

やっと気づいたんだよ・・・

「あんたがいなくなるって知って、やっとわかったんだよ、考えてもいなかったよ、ビックリだよ」

見られたくなくて・・・ 少しずつアイツから後ずさりして離れて・・・

「あんたが傍にいるのがあたりまえになってた、いなくなるなんて考えもしなくなるくらい、あんたはずっと傍にいるって、ずっと・・・ずっと傍にいてほしいほど・・・」

ああもう・・・バカみたい・・・

「あんたのことが好きだったの！ 好きだって気がつかないほど好きだったの！」

もう・・・ 立ってられない・・・ 言葉にしたら・・・ もっともっと悲しくなって・・・

「アカリ・・・」

アイツが後ろから私のこと抱きしめると・・・ 私は・・・

「行かないでよ・・・ 行かないでよ！ 行かないでよ・・・」

子どもみたいに大声で泣いちゃって・・・

「アカリ・・・」

耳元で聞こえるアイツの声も涙声になってて・・・

泣かないでよ・・・ 私と離れることなんか・・・ どうでもいいって声出してよ・・・

でないと私・・・

「カズオ・・・ 行かないで・・・」

あきらめられないよ・・・

コンビニでチョコ買って、店の前でイッキに一箱食べたら、ちょっと落ち着いた。

やっぱチョコだよな。

カズオにもちょっとだけあげたけどな。

なんかさっき、すごい告白しちゃったから、恥ずかしくてあんまり顔見れないよ。

「アカリ」

「な、なによ？」

「チョコついてんぞ」

「ウソ、どこ？」

カズオがああの“LOVE & PEASE”のTシャツの裾グイッと引っ張って、私の口元を拭いた。

「やだあ！ そんな汚いTシャツで拭かないでよ！」

「ちゃんと洗濯してるって」

笑ってるカズオの顔は・・・ あったかくて・・・

もうこの顔は見られないのかなって・・・

「ア、アカリ、なんで泣くんだよ、マジで洗濯してっからよ」

そんなんじゃないよ、バカ！

「汗臭かったもん！」

「マジ？」

「匂い嗅がないでよ！ コンビニの店員がこっち見てるよ！」

いつもと変わらなくて、もうすぐいなくなるなんて信じられないくらい・・・ 信じられな

いよ・・・

私の赤い自転車が真夜中の風を切って走る。

カズオの身体に腕をまわして、顔を背中にくっつけて・・・

ずっとこうしていたい、ずっと・・・

このままどこかに連れて行ってよ・・・ このままずっと・・・

涙がカズオのTシャツ濡らしちゃってるけど・・・ 止まらないんだもん・・・

「アカリーーー！」

風の中、カズオの声が聞こえる。

「なにーーー？」

「俺・・・ よ！」

「なにーーー？ 聞こえないよーーー！」

カズオが自転車をスーッと路肩に止めた。

「俺さ・・・ 戻ってくるよ」

「え？」

カズオは背中向けたまま

「親父んところでも高校行かせてくれるっつうからよ、卒業、来年の春卒業したら・・・

社長んとこの工務店に就職する」

え・・・

「つうか、就職させてもらえるようにがんばっから、だから、ぜってえまた戻ってくる」

カズオ・・・

「だから、もう泣くなよ」

私が泣いてるのわかってたんだ・・・

わかるよね・・・ Tシャツの背中、こんなに濡れちゃってたら・・・

「ウソついたら一生口きかない！」

「俺、アカリにウソついたこと一度もねえじゃん」

「ウソは・・・つかなかったけど、言わなかったでしょ？ お父さんのこと言ってくれなかつたじゃん」

「言え・・・なかつたな」

「弱虫！」

「だよな」

情けなさそうな笑い声が聞こえる。

「いいよもう、戻ってくるんなら許してあげる」

カズオの背中にギュウッて顔を押しつけた。

カズオが、身体にまわした私の手をぎゅうってにぎって、ペダルを踏んだ。

## 17.理由

---

学校にいると何も変わらない。

カズオがいなくなるなんてウソなんじゃないかなって思うほど実感わかないんだよなあ。

カズオは午前中は現場に挨拶に行くって言ってたから、朝もいつもみたいにいなかったし。

「ただいま〜」

キッチンに行くと、ゲッ、お父さん！

なんでこんな時間にいるのよ？

どうでもいいけど、無視。

ゆうべ引っぱたかれたこと、絶対許さないからね。

「アカリ、お父さんがアカリのお気に入りのケーキ屋さんのケーキ買ってきてくれたのよ」

私の機嫌とろうとしてる魂胆がミエミエだよ。

「アカリ、カズオくんも呼んでこい、みんなでおやつにしよう」

お母さんがお父さんの脇腹を肘で突ついたので見えた。

「アカリ、好きなを選んで持って行ってあげたら？」

さすがお母さんはわかってるよね。

みんなでおやつなんて楽しくもなんともないよ。

箱を開けると・・・

シュークリームとプリン・・・

あの店で、これをチョイス・・・ あ、そ。

離れのドアの前で、「カズオ！」って呼ぶと、バタバタ走ってくる音がした。

「アカリ、おかえり！」

え？

「う、うん、あの、これ、お母さんが・・・」

買ってきたのはお父さんだけだね。

「お！ サンキュ！」

「あのお店のだよ」

「マジ？ ヤッタ！」

だよね、シュークリーム大好きだもんね、フッ。

カズオの肩越しに見える離れの中は、六畳なのにガラーンとして広く見える。

カズオの荷物は古びたポストンバッグだけ。

あとは隅の方きれいに片づけられていて・・・ 床の水拭きしてたんだね。

「私の部屋で食べようよ」

ここは・・・ なんかイヤ。

カズオが口のまわりクリームだらけにしてシュークリーム食べてる。

いいけど。

「アカリも食べよ、うまいぞ」

ちょ、グイッて私の口に食べかけの押しつけないでよ！

「もう！ やだあ！ 口のまわりクリームついちゃったじゃん！ そのティッシュ取っ」

エ？

なに これ これって

カズオがきまり悪そうに、またシュークリーム食べてるけど？

「ねえ」

「ン？」

「今のって なに？」

「な、なにって、そ、それは、だから、なんつうか・・・」

「クリームだらけの口で するっ？」

「あ、ご、ごめん」

「謝るっ？ キスしといて、謝る？」

「や、あの、怒ってっから」

「怒るでしょっ？ ファーストキスだよっ？ こんなクリームベチャベチャのって！」

「ごめん」

「だからっ、なんで謝るのよっ？」

「怒ってっから」

「怒るよ！ てか、怒ってないけど、 怒るでしょっ！」

「ごめん」

「だからあっ、何で謝るのって聞いてんのっ！」

「アカリが怒ってっから」

「なんで怒ってるかわかって謝ってんのっ？」

「それは・・・ 急に・・・ キス・・・したから」

「じゃなくて！ 状況！ あんたもっ、私もっ、クリームだらけの口のときに、なんでキ」

「アカリ～、紅茶持ってきたわよ」

お、お母さん・・・！

「ティッシュ！ 早く！ あんたも！」

口のまわり拭いて・・・

「ど、どうぞ」

お母さんがニコニコして入ってきた。

この直前に何があったか知ったらビックリするよ、お母さん・・・。

「プリンもあるのよ、持ってくる？」

「ううん・・・ いい・・・」

「そうね、今あんまり食べたら晩ご飯入らなくなるものね」

「うん」

お母さん、カズオがね・・・って言ってやりたいっ、言わないけど、言えないしっ。

ドアが閉まった途端、ハアアア・・・ 力抜けちゃった。

「アカリ、ごめんな」

「だから、したことを怒ってるんじゃないくて、状況っていうか」

「じゃなくて、親父のこと、アカリに言えなくてごめん」

「それは・・・ もういいよ」

「アカリには俺からちゃんと言うつもりだったんだけどよ・・・

電話あったのが、あの追試の答案返ってきた日で、俺もまだ混乱してて」

「カズオ、いいよ、もうわかってるし」

「デートのときには言おうと思ってたんだけど、アカリといる時間が、なんつうか、

すげえ大切で、すげえしあわせで、あんな話したくなくて・・・」

「まあ・・・ね、あのとき、そんな話されたら・・・

私、カズオの顔にシュークリーム投げつけて、 とっとと帰っただろうな」

「ヤッベエ、言わなくてよかったあ」

「じゃなくて！ 少しは反省しなさいよ！」

「あ、はい」

あんなに辛かったのに、苦しかったのに、こうやって笑って話せるようになったね。

でも・・・ ひとつだけ聞きたいことがある。

どうして・・・

「カズオは、どうして、お父さんのところに行くことにしたの？」

カズオはちょっと困ったように笑って・・・

「世間体が悪いつつたんだよ」

「ハ？」

「自分の息子が他人の世話になってるって聞いて恥かいたって」

なにそれ？

「じっちゃんは、俺のかあちゃんの父親なんだけどよ。

親父とじっちゃんは仲悪かったらしくてよ。

そのじっちゃんが昔世話になってたところに俺が世話になってるってのも気に食わねえって」  
それがカズオを引き取る理由？ なにそれ？

「社長は、このまま俺のこと面倒みるって・・・言ってくれて」

カズオの声がちょっとかすれて・・・

「そしたら、わけわかんねえこと言い出してよ」

お父さんが言った「訴訟する」って、あれのことだよな。

「もう行くっきゃねえなって、実の父親だしよ」

カズオはそう言って笑ったけど、目は全然笑ってないよ。

## 18.最後の晩御飯

---

お母さん、張り切っちゃったね。

ちらし寿司にから揚げに煮物に天ぷらにステーキに・・・

「カズオくんはポテトサラダも好きでしょ」って、食べきれないよ。

いつもの、休みの日の晩御飯の光景。

カズオは美味しそうにバックバク食べて、お父さんはビール飲んで顔真っ赤で・・・

明日にはカズオがいないなんて信じられないよ。

「アカリ、おまえ、から揚げ好きだろ、ほら食べなさい」

お父さんがぎこちなく私の機嫌とってくるのがイヤ！

「お父さん取ってやろうか」

って、お父さんのお箸でつかんだヤツなんか死んでも食べたくないっ。

私に無言で拒否られたお父さんは、どうすりゃいいんだ的にかから揚げつかんだままで、

「カズオくん、ほら、食べなさい」

ってカズオのお皿に載せたらカズオは拒否れないでしょ！

「ありがとうございます！」

嬉しそうに食べてるけど、お父さんのお箸でつかんだやつだよ？

いいけど。

お腹いーっばいだけど、テーブルの上にはまだたくさん残ってる。

お母さん、作り過ぎだよ。

「カズオくん、明日これ詰めてお弁当作るから、電車の中でも食べてちょうだいね」

「マジっすか？ ありがとうございます！」

残り物だけど・・・ カズオは、お母さんの料理が美味しいって言ってたから。

でも、今のお母さんの言葉で・・・ 明日、カズオが行ってしまうって、ちょっと実感しちゃって。

お母さんがお茶を入れて・・・

なんだかみんな黙っちゃって・・・

「あ、あの」

カズオが口を開いて、みんながいっせいにカズオを見ちゃったから、

なんかドギマギした顔になって・・・

「今までありがとうございました。本当に、お世話になりました」

カズオがそう言って頭を下げる。

お母さんは目を真っ赤にして、カズオの前にお茶を置いて・・・

「そんな改まった挨拶はいいよ」

お父さんはちょっと泣きそうな顔でそう言って笑った。

「カズオくんと一緒に暮らせて楽しかったよ」

お母さんはウルウルしながら、お父さんの言葉にうなずいた。

「まあ、あのお父さんと暮らすのは・・・初めてだから、最初は慣れないかもしれないが、カズオくんなら大丈夫だ、どこに行ってもみんなに好かれるから、なあ、お母さん」

「本当にそうよ」

お母さんは涙声でうなずいた。

「あの頑固なうちの棟梁だって、カズオくんのことを可愛がってたしな。

他の連中もカズオくんがいなくなるのは淋しいって・・・ンッ、言ってたよ」

お父さん、咳払いして泣きそうになるのをごまかしたね。

「ありがとうございます」

お母さんの顔はもう涙でグシャグシャ。

そして・・・

沈黙

やだな・・・ こんな雰囲気・・・ ごちそうさまって言って立ちあがろうかな・・・

「カズオくん」「社長」

お父さんとカズオが同時に・・・

「ン？ なんだ？」

「あ、いや、あの、社長から・・・」

「そ、そうか？ まあ、なんだな、向こうに行ったら、しっかり勉強して、ちゃんと高校卒業しなさい」

「はい」

「ヤスさんが、カズオくんのおじいさんが苦勞して高校に入れてくれたんだからな。

カズオくんがいちばんわかってるだろうが、あの生活で高校に入れるのは大變だったと思う。

その気持ちを絶対無駄にしてはダメだぞ」

だからなんだね・・・

カズオくんのおじいさんがどんなに苦勞してカズオを高校に入れたかわかったから、

お父さんは「高校を卒業させてやりたい」って引き取ったんだ・・・ やっとわかった。

「はい、ちゃんと、絶対卒業します」

「がんばれよ」

お父さんはそう言ってニッコリした。

そしてまた・・・

沈黙

「あ、そうそう！ お父さんが買ってきたケーキを」

お母さんも沈黙に耐えられなくなったんだね。

「あの、社長」

お母さんが冷蔵庫の前でストップモーション。

「なんだ？」

カズオが、いつもの、大切なこと言いたくて、なかなか言えない顔になって・・・

「どうした？」

フウ〜って大きく息吐いて・・・

「俺、ちゃんと高校卒業します」

「うん、そうだ」

「そ、そんで、卒業したら・・・ 社長の工務店に就職させてください！」

お父さんがビックリした顔で目を見開いたまま・・・

「ハ、ハンパな気持ちで言ってるんじゃないくて、俺、ここに来て、社長んとこで働かせてもらって、

つうか、俺なんて全然まだなんもできなかったし、失敗ばっかして迷惑かけて、  
でも俺、本気でこの仕事してえって思ったんす。いっちょまえの職人になりてえって」

お父さんの目が・・・

み、見ないでおこう・・・

「俺、ここに連れてきてもらう前は、高校なんてどうでもよかったし、じっちゃん死んで、  
高校やめて、テキト〜にコンビニとか弁当屋とかでバイトすればいいかって、  
やりてえことなかったし、俺なんかができることなんてなんもねえって思ってたし。  
でも、社長んとこで、社長や棟梁にいろんなこと教えてもらって、楽しいって、  
正直キツイっすけど、でも、すげえ、なんつうか、もっといろいろ覚えてえって、  
もっと仕事覚えて・・・ だから、あの・・・ 社長の工務店で働かせてください！」

カズオが立ち上がって、頭を下げて・・・

沈黙

お母さんは冷蔵庫の前で固まったまま。

お父さんは・・・ どんな顔してるのか怖くて見れないよ・・・

「カズオ、座りなさい」

「は、はい」

今・・・ カズオって言った？ カズオくんじゃなくて。

チラッとお父さんを見ると、すごく真剣な顔でカズオを見てる。

「高校を卒業したら、面接に来なさい」

「え？」

「今度は正社員だからな、ちゃんと面接して、試用期間は三か月、わかったか」

「はい！」

カズオの顔がパーッと明るくなった。

「しかし、こんな小さな工務店に就職したいなんて物好きだなあ」

お父さんはそう言って笑ったけど、目の端に涙・・・ 見なかったことにしよう。

「そのときには、俺もカズオのお父さんに挨拶しに行くから、それは心配するな」

「あ、ありがとうございます」

そうだよね・・・

カズオのお父さんは、おじいさんが世話になったこの工務店にすることが気に食わないって・・・

お父さん、そんなことまでちゃんと考えてるんだ・・・

「向こうに行ったら、ちゃんとお父さんのいうことをきいて、親孝行するんだぞ」

「はい・・・」

「孝行したいときは親はなし、墓に布団は着せられずだからな」

なに今の???

「もしかしたら一生会えなかったかもしれないお父さんと会えたんだ、よかったじゃないか」

よかった・・・のかな・・・

「実の親とはいえ、ずっと離れてたんだからいろいろあるとは思う。

辛いこともあるかもれない、泣きたいときもあるだろうが、

そこは歯を食いしばって耐えることも必要なんだからな」

「はい」

「でもな・・・ 耐えて耐えて、どうしても耐え切れなくなったら・・・ ここに戻ってこい」  
え？

「いつでも、戻ってこい、ここはおまえの、もうひとつの家だ」

お父さん・・・

カズオがくちびる嚙んで必死に我慢してるけど・・・ 目からポロポロ涙が・・・

「お父さん・・・」

「ア、アカリ、どうした？」

「大好きいいい・・・ウェ～ン・・・」

「な、なんでおまえが泣くんだ、だ、大好きって、な、なに急に、なあ、お母さん」  
お母さんは冷蔵庫の前でエプロンで顔隠して号泣してるよおお。

「社長」

カズオが手で涙拭って・・・

「俺、戻ってきません」

え？

「卒業するまでは、絶対に戻ってきません」

カズオの声は震えてるけど・・・ なんか力強くて・・・

「そんな、そんなハンパな真似したら、社長、いつも叱るじゃないスカ。

中途半端なこと・・・するくらいなら・・・ 辞めちまえって」

カズオは涙ポロポロ流しながら、笑って見せた。

カズオ～・・・ カッコいいよおお・・・ ウェ～ン・・・

お父さんが・・・ 涙で顔グジャグジャだよおお・・・ ちょっとキモいけど、今はいいよおお・・・

.

「カズオ、おまえは・・・ 俺の若い頃にそっくりだな」

それって褒めてるのかわかんないけどお・・・

カズオが嬉しそうにしてるからいいよおお・・・

## 19. シャンプーと当たり

---

カズオがタオルで髪の毛ゴシゴシ拭きながら入ってきた。

「シャンプー使った？」

「使った使った！ やっぱ違ええよなあ」

ビックリだったよ。

カズオがお風呂入るときになにげに聞いたんだよね。

「シャンプー、どんなの使ってるの？」って。

カズオが使ってるシャンプーとかお風呂で見たことなかったから。

「セッケン」

ハ？

「セッケンで全部洗ってっけど」

ハア〜ッ？

「だから、いつも髪の毛ボッサボサなんだよ！ ちゃんとシャンプー使いなさいよ！」

てことで、今日だけ特別に私のシャンプーとコンディショナー使っていていいよって言ってあげた。

「ラックの上のやつだからね」って。

「なんかさ、サラサラすんだよ」

「どれどれ？」って、カズオの頭グイッとつかんで・・・

私と同じ香り・・・じゃない！

「カズオ、これって、お父さんのだよ！」

「ちゃんとラックに入ってるの使ったんだけど」

「ラックのどこ？」

「どこって・・・ 黒いやつ」

「ああああっ、お父さんのだあ！」

「マジ？ 社長に悪いことしちゃったな」

「じゃなくて！ あれって、おっさん用だよ！」

「すっげえ気持ちよかったけどなあ、やっぱセッケンと違うなあって」

だったらいいけどっ。

あ！

「ねえ、コンビニ行こう！」

「え、あの・・・」

「ナプキンじゃないよ！」

「あ、ああ・・・ んじゃ、チョコ？」

「あんたのシャンプー！」

えっと・・・ メンズシャンプーなんて買ったことないからわかんないなあ。

これは・・・ 薄毛用、ちがう。

あ、これは？ リンス・イン・シャンプー、えっと・・・ ミントって書いてるから若い人用だよな？

お父さんが使ってるやつの匂いって、なんか・・・ いいや、どうでも。

「カズオ、これ！」

「おう」

って、ジーパンのお尻のポケットからお財布出そうとしたから、

「これは私が買ってあげる」

「でも、俺だからさ」

「いいの、買いたいの」

って言ったら、ニコツとして

「サンキュ！」

「その代わりにアイス買って」

「おしっ！ どれがいい？」

「まかせる」

ガリガリ君

まかせるって言った私が悪かったよ。

コンビニの横のバス亭のベンチ。

もうこの時間はバスなんて来ないけどね。

私の隣りに座ってガリガリ君かじりながら、カズオは何を考えてるんだろ？

「冷てっ」とか言いながら、フツツーにかじってるけどね。

「カズオ」

「ン？」

って私のことを見た顔も、いつもの顔で・・・

なんかちょっと憎たらしくなってきた。

「卒業するまで、こっちには戻らないんだよね？」

「うん」

「そっかあ、だったらさあ、その間に私にカレシできたらゴメンね」

「えっ？」

落とす？ そんなマンガみたいに、ポロって、食べかけのガリガリ君地面に落とす？

「だってさあ、来年の春までなんて長いじゃん」

「ア、アカリ・・・」

あ～あ、足元でガリガリ君溶けてるよ。

「マ、マジで、言ってんのか？」

「マジだったらどうする？」

カズオが眉間にシワ寄せて考えてる考えてる、どうせ大した言葉は浮かばないだろうけど。

「イヤだ」

そ　　そんな　　素直に　　言われちゃったら・・・

「あげる！」

一口しかかじってない私のガリガリ君をカズオの口に突っ込んだ。

「帰ろ！」

「え、あ、ああ」

カズオは口にガリガリ君入れたまま、自転車のスタンドを足でけり上げた。

カズオの身体に腕をまわして、背中にピタッと顔をくっつけてると、

こうやってるのが自然で、明日からもうこうすることができないって思えないよ。

「アーッ！」

カズオがキーンと自転車止めた。

「ど、どうしたの？」

「当たり！」

「えっ？　な、何に当たっちゃったの？」

「当たりだよ当たり！」

「だから、何に？」

「ガリガリ君！」

「ハ？」

「ほれ」

ってガリガリ君の棒を・・・

『一本当たり　ガリガリ君かガリ子ちゃんと交換できます。ガリガリ君ノッチとは交換できません』

なにこれ？

「俺、ガリガリ君の当たりって初めて見た！　すげえ！」

「何がすごいなの？」

「これ持ってったら、タダでもう一本ガリガリ君がもらえんだよ！」

.....

「これ、アカリのだったから、アカリが持ってけよ」

「カズオ・・・」

「ン？」

「いない」

「なんで？」

「いないから」

「そんじゃ、これ、俺もらっていいか？」

「好きにして」

「おお！ サンキュ！」

マジで新しいカレシ探そうかな・・・

明日から来年の春まで会えなくなるのに・・・ ガリガリ君の当たり？

どーーーーでもいい！

## 20. ノートとハンカチ

---

カズオが裏口の前に自転車止めて、私は荷台から降りた。

「アカリ、サンキュ」

カズオはそう言って、シャンプーの入ったコンビニの袋をかかげて見せた。

「うん」

それで？ どうすればいいの？

カズオが私のこと黙って見つめてる、何か言いたそうで言えないって顔で。

私も言いたいことがいっぱいある気がするんだけど、何を言えばいいのかわかんない。

だって、今さら何か言ったら、泣いたら、何も変わらないし。

「オヤスミ」

いつもみたいな声で、カズオの顔見ないで、そのまま裏口のドア閉めた。

カズオは明日の始発で行くって言ってたよね、お父さんが駅まで送るって。

私が起きてきた頃にはいない。

それって、いつもの朝みたいじゃん。

カズオとは・・・ もう・・・ 会えないんだよね・・・ 来年の春まで・・・

来年の春なんて、すごくすごく遠くて、一生会えないのと同じくらい遠く感じる。

ちがう、本当は・・・ 実感ないんだよ、カズオがいなくなるって。

さっきも、フツターの顔して、ガリガリ君の当たりがどうのって、そんなことしか言ってなかったし。

カズオはどう思ってるのかなあ？ もうふっ切れたのかな？

来年の春には戻ってくるってきめたから？

だけど、その間私はひとりで、カズオは新しい生活が始まって、いろんなことが変わるのに。

もしかしたら、向こうで好きな子ができるかもしれないじゃん。

やっぱ近くにいる子の方がいいとか思ったりしてさ。

いいけど。

そしたら私もカズオのことなんか忘れる。

それに私にだって好きな人ができるかもしれないじゃん、さっきは冗談で言ったけど・・・

じゃなくて、来年の春から私、ガッツリ受験生だよ、恋愛どころじゃないよ。

来年どころか、二学期になったら進路指導が始まって受験街道まっしぐらだよ。

よかったのかも、うん、よかったんだよ、恋とかそんなのに浮かれてられなくなるもん。

私はいいとしてもさ、カズオは大丈夫なのかなあ？

ちゃんと卒業するとか言ってたけど、また英語で赤点とってても・・・ あ！ 忘れてた！  
机の上の6冊のノート。  
今から持っていく？ なんか会いたくない。  
キッチンに置いておけば、明日の朝気づくよね。  
えっと・・・ あ、この手提げ袋に入れて、追試のときに使ったやつ・・・  
メモ書いて入れておく？ だね。

『カズオへ

これは、それぞれの科目のノートの作り方を書いたノートです。  
少しだけ、試験のときに、こういうところを注意して覚えた方がいいって例文も書いてます。  
現国・英語・英文法・古文・世界史。日本史だけです。  
理系科目は、自力でがんばってください。  
アカリ』

そうだよ、これは、お父さんに引っぱたかれて、チェーン外れて、チョコ買いに行った、  
あの日作ってたんだよ。  
最初は自分の勉強してたんだけど、なんとなく思いついて、これを作ってるときは、  
いろんなこと考えなくて済んで、夢中になって作ったんだよ。  
カズオのためっていうより自分のためだったかも。

キッチンに置いてこよう。

朝起きて、キッチンに行くと、お母さんがいて、いつもの朝。

「カズオくん、もう行ったわよ」  
わかってるよ。

「アカリのノート、喜んでたわよ」  
いいよどうでも。

「お父さんも感心してたわよ」  
もっとどうでもいいよ。

「そうそう！ カズオくんから預かってたのよ、アカリに渡してくれって」  
お母さんが何か入ってるコンビニの袋を・・・

「部屋に置いといて。帰ってから見る」

お弁当箱つかんで、キッチンを出た。

昼休み。

教室のザワザワした音がたまらなくなっていて、屋上に来たけど・・・

校庭に植えてある木が、どれも夏の光でキラキラしてて・・・

校門が見える。

あそこに・・・ カズオが現れたときは死ぬほどビックリしたよ。

汚ったない恰好で、ニッコニコして手なんか振っちゃって。

シッシツて追い返したのに、余計に大きく手を振って・・・ バカだよ。

なんだかすごく遠いことのように思える。

なんだか・・・ 胸の奥が重たくて・・・ イヤだ。

教室に戻ろう。

「ただいま～」

あれ？ お母さんいないの？ 買い物かな、いいけど。

部屋に入ると、机の上にコンビニの袋。

私にとって、カズオが私にくれるものなんてあるの？

なにこれ？

あのTシャツ？ LOVE & PEASEの・・・ あれ？



Sに×してCって書いてある。

よくできました、正解です。

てか、なんでこんなTシャツ、私にくれたの？

着ないよ！ てか、いらんし、こんな汚いの。

あれ？ なんか手紙みたいなのが・・・ これってノート破ったんじゃないの？

ふつうさ、便箋とかさ、いいけど。

『アカリ、なに書いていいかわかんないけど、』

だったら、なんで書こうと思ったのよ？

『オレはしばらくアカリのそばにいられないから、代わりにこのTシャツ置いていく。』

ハ？

『このTシャツで、アカリの鼻水ふいて、口についたチョコふいて、なみだふいた、』

涙くらい漢字で書けよ。

『これはアカリのハンカチだから。』

なに言ってんの？

こんなの、こんなのがハンカチって・・・

『オレがもどってくるまでは、これでガマンしてくれよ。』

戻るくらい漢字で書けっての、現国大丈夫かな？

『オレさ、ゆうベガンかけたんだ。』

ガン？ なに？

『もしも、もしも、ガリガリ君にアタリが出たら、』

ガんで・・・ 願？

『オレはすげえ早くもどってこれるって、アカリのそばに、すぐにもどれるって』

バカみたい・・・

『そしたら、アタリが出たじゃん！ ビックリした！ あれ、マジでアタリ出るのキセキだからさ。』

アイスの棒に奇跡感じる？

『だから、きっと、思ってるより早くもどってこれる！』

ガリガリ君のアタリの力を信じるの？ いいけど。

『だから、オレがもどってくるまで、新しいカレシ作るなよ』

バカじゃない？

バカみたい。

こんなTシャツ、ハンカチって・・・

ちがうよ！ こんなTシャツは私のハンカチじゃないよ！ バカ！

私のハンカチは・・・

私の涙拭いてくれるのは・・・ カズオだよ！

カズオじゃなきゃダメなんだよ！ カズオの腕の中じゃなきゃダメなんだよ！

『LOVE & PEACEって、愛と平和って意味だよな。』

愛っていう字がすごいことになってるけど。

『オレにとっては、アカリがLOVE & PEACE』

なに・・・なに言ってるの・・・

どうするのよ・・・ 涙出てきたのに・・・ あんたがいないよ・・・

私のハンカチは、あんたなのに・・・

Tシャツで涙おさえても・・・

「ちがうよ・・・ これじゃないよ・・・ ホッとしないよ・・・ いつもみたいに・・・ ホッとしないよ」

Tシャツが涙で濡れていっても・・・

全然ホッとしないよ・・・

「カズオのバカーー！」

え

なに

「ごめん」

背中から 抱きしめられて・・・る・・・

なに？

「バカでごめんな」

え？

振り向いたら

ウソ

「な な なんて」

「追い返された」

情けない顔で笑うその・・・

「なんで？」

なんで 今 ここに

「親父の奥さんが、どうしてもイヤだって」

なに？

「俺のこと引き取んのムリだっつって」

なんか よくわかんない

「社長に電話して・・・ そんで、戻ってきた」

戻って・・・ 戻ってきた・・・

「戻ってきた？」

「うん」

「ウソ！」

「え、や、マジ」

「ウソ！」

「マジだって」

「ウソ！」

ああもう……

「バカ————！」

カズオの腕の中に飛び込んで……

ここだよ…… やっぱりここしかないんだよ…… だって…… ホッとするもん……

カズオが私の頭を優しくなでて……

「やっぱさ」

カズオの声も涙声で……

「ガリガリ君のアタリはすげえよな」

なんだかわかんないけど……

「すごいよおお」

カズオの腕の中で、ずっと子どもみたいに泣いた。

## 21.LOVE & PEACE

---

カズオのお父さんは再婚していて、カズオを引き取るって決めたとき、奥さんは反対したんだって、高校生の男の子の面倒なんかみたくないって。それで、カズオが来る日の朝、離婚するってキレたって。

そりゃそうだよね。

カズオのお父さんと私のお父さんが電話で話して詳しいことがわかったんだけど。お父さんが言ってた。

「カズオのお父さんは、きっと少しは親らしいことをしたかったんだよ」

そうかなあ、振り回しただけじゃん。

「小さい頃別れたっきりでもな、親はそういうもんだ」

よくわかんないけど。

あの日、学校から帰ってきたとき、お母さんがいなかったのは、近くのホームセンターでカズオの離れに置く家具が買いに行ってたからだった。前は有り合わせの寄せ集めと布団だけだったけど、今は、ベッドと机と本棚と洋服かけとカーペットが置いてあって、いっちょまえの部屋じゃん。カズオが戻ってくるって知ってホームセンターに走るお母さん・・・ 笑える。

「アカリ」

お風呂上りで、タオルで髪の毛グシャグシャって拭きながらカズオが入ってきた。

「ノックくらいしてよ」

「あ、悪りい」

悪いと思ってないくせに。

「なによ？」

「あのさ、明日、ヒマ？」

日曜日だから・・・ どこかに行こうってこと？

私は夏休みだけど、カズオは平日は現場、まだまだ見習いだもんね。

「予定はないけど、なんで？」

「来週、夏期講習のテストがあるんだけどよ」

ハ？ ああ、定時制のね。

「英語・・・ 教えてくんねえかな」

ハァァァァァ？

「あんたね！ 私、ノート作ってやったでしょ！」

「そうなんだけどよ、文法が、な～んかよくわかんねえんだよなあ」

「英文法のノートの作り方のノートも作ってやったよねっ？」

「やってる！ ちゃんと、俺なりに、やってっから」

あんたなりに・・・っていうのが怖い。

「わかったよ、赤点とらないようにしてあげるよ」

「ちげーよ、俺はもっと上ねらってたよ」

「ハ？」

「やっぱさ、ギリじゃなくてよ、平均点はとろうって思ってよ」

「目標低すぎ！」

「あ、すみません」

なんでこんなバカ好きになっちゃったのかな？

私はもっと知的な人がタイプなんだけどなあ。

「アカリ、どした？」

「なんであんたみたいなバカを好きになったのかって考えてたの！」

「それは・・・あれだよ・・・なんつうか・・・あ！棟梁が言ってた！」

「棟梁？」

「バカとハサミは使いよう」

笑ってるけどさ・・・

いいけど。

背中から抱きしめてくる あんたの腕の中 あったかいから  
見上げると あったかい目で いつも私のこと見てるから

「アカリは俺のラブ・アンド・ピース！」

よくそんなこと、恥ずかしくないで言えるよ。

「ピースのスペルは？」

「えっと・・・ P・E・A・C・E」

「正解！」

「もう間違えねえからな、なんだっけな、前に、あ！ P・E・A・Sじゃねえんだよ」

PEAS？

ああ！ 私が熱出してたときに言ってた、あれはPEESで

「カズオ、PEASは豆だよ」

「豆？」

「アハハハハ！ バッカみたい！」

「豆かよお」

あんたとなら・・・

笑えるから、だから・・・

いいの。

Fin.

## あとがき

---

1998年当時、これを書くときに気をつけたのは、ラブシーンだった。  
高校の文化祭に出すものだから、あんまりそういうのは濃くない方がいいなと。

当時、これを読んだ私のまわりの人たちは、最初アカリを好きになれなかったと言った。  
読んでいくうちに、だんだんアカリが好きになるとも言った。

遠い過去の記憶なので曖昧だが、「いい子」を書きたくなかった記憶がある。

私が高校生ときは、心の中で親に反抗し、気の合わない同級生に壁を作っていた。

（気の合う同級生としか接してなかったが）

基本、当時から人間不信だった。

それをそのまま書きたかった気がする。

コピーに毛が生えたようなこの本は、どこでどうしてなのか、他の地方に行っていた。  
まったく知らない土地の、まったく知らない高校生から手紙をもらった。

「この物語が大好きです」と。

すごく嬉しかった。

40歳の私が書いた物語を現役の高校生が好きだと言ってくれたのは感動だった。

今回これを電子書籍にするために、PCに書き写しているうちに、  
あちこちを削ったり、別の場所に移したり、途中、なかった場面も浮かんできて書いた。

細かいところは違うが筋はそのまま・・・のつもりだったのだが、

ラスト近くを書いているうちに、まったく心が動かなくなった。

これは違うんだなと思い、頭の中に浮かぶままのものを書いていたら、

「そうなのか！」と。

正直、原本が「無難に高校生向けで」だったので、

高校生（今なら中学生か？）が軽く読む高校生の恋のようなじゃれあいのような物語。

それはそれでいいかなと思っている。

ちなみに・・・

赤点取って、追試で93点とらせた話は実話である。

いちばん上の英語だ。

私がノートを作り、ポイントを教えて、3点取ったやつが93点取れたのである。